瓦 塚 古 墳

平成31年３月

宇都宮市教育委員会

瓦塚古墳遠景（南から）

瓦塚古墳全景（上空から）

序

宇都宮市北部の長岡丘陵南西斜面に位置する瓦塚古墳群は、前方後円墳１基と円墳約40基からなる市内に残存する最大規模の古墳群であり、今回報告する瓦塚古墳は、古墳群唯一の前方後円墳であり中核をなす古墳となります。

瓦塚古墳は、明治期から発掘調査の記録があり、古くから研究者はもとより地元の方々の関心を惹きつけ、平成７年には瓦塚古墳群として宇都宮市指定文化財に指定されました。また、平成９年には地元有志により「瓦塚古墳群愛護会」が結成され、地域ぐるみで維持活動や周辺の公園整備に取り組まれてきました。

発掘調査は、古墳整備事業に先立ち、古墳の規模・構造を確認するため、平成13年７月から３か年にわたり実施されたものです。調査の結果、人物埴輪をはじめとした多くの形象埴輪や埴輪列が確認されたほか、古墳の規模なども確認されました。

この成果は古墳時代後期の地域社会のあり方を考える上で、極めて貴重なものであり、本報告書が多くの方々により広くご活用いただければ幸いです。

最後になりますが、本調査及び報告書の作成にあたり、多大なるご協力とご理解を賜りました関係諸機関及び関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成31年3月29日

宇都宮市教育委員会

教育長　水　越　久　夫

例　　言

1　本報告書は、栃木県宇都宮市長岡町1188他に所在する瓦塚古墳の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、宇都宮市指定史跡である瓦塚古墳の規模・構造等を確認し、今後の保存整備等に役立てようとするもので、下表のとおり平成13～15年度の3次に渡って実施した。

調査年次	調査期間	調査面積	主な調査内容
第1次調査	平成13年7月31日～10月31日	約500㎡	周溝、石室、墓道等
第2次調査	平成14年7月28日～9月30日	約1,100㎡	葺石、円筒埴輪列等
第3次調査	平成15年7月28日～12月19日	約300㎡	墳頂部の埴輪列等

3　発掘調査で確認した葺石及び円筒埴輪列（主に基部）については、原則として覆土保存とし、保存に支障のあるものだけを取り上げた。

4　発掘調査における測量及び写真撮影等は、調査補助員の協力を得て、大塚雅之・塚田文雄がこれにあたった。また報告書作成に伴う遺構・遺物の整理及び写真撮影等は、森千鶴子・斎藤詩穂・角田祥一の協力を得て、澁谷麻友子・梁木誠がこれにあたった。

5　本書の執筆は、第1章を梁木が、第Ⅱ章・第Ⅲ章－1・2及び第Ⅳ章を澁谷が、第Ⅲ章－3を清地良太がそれぞれ担当した。

6　本遺跡出土の遺物及び図面・写真等の記録類は、宇都宮市教育委員会で保管している。

7　発掘調査の関係者は次のとおりである。

○発掘調査時（平成13～15年度）

［指導助言］　宇都宮市文化財保護審議委員会委員　塙　静夫
〃　大金　宣亮
〃　橋本　澄朗

宇都宮市教育委員会　教育長　高梨眞佐岐（平成13・14年度）
伊藤　文雄（平成15年度）

（調査担当）文化課長　桜井敬朔（平成13年度）、北条和久（平成14・15年度）
文化財保護係長　手塚英男（平成13年度）、梁木　誠（平成14・15年度）
文化財保護係　大塚雅之・富川　努・神野安伸・増山孝之・今平利幸・塚田文夫（平成14・15年度）・板倉英伸（平成14・15年度）・京極隆利（平成13・14年度）・清水正幸（平成13年度）・須田浩太郎・井上俊邦（平成15年度）・吉澤宣行（平成13・14年度）・山岸博幸・鈴木雅彦・大島羊子（平成15年度）

（調査補助員）

〈平成13・14年度〉

青柳和利　小澤拓朗　小澤美和子　半田弘　半田稔　関口典子　長嶋久子　長嶋聡

〈平成15年度〉

青柳和利　小澤拓朗　関口典子　半田弘　半田稔

○報告書作成時（平成30年度）

［指導助言］ 宇都宮市文化財保護審議委員会委員　橋本　澄朗

〃　竹澤　　謙

宇都宮市教育委員会　教育長　水越　久夫

教育次長　菊池　康夫

（調査担当）文化課長　松本邦夫

文化課主幹　今平利幸

文化財保護グループ　君島直人（係長）・中村忠守・近藤　真・竹下　亘・星野治彦・清地良太・田中宏迪・柳川実咲・齋藤なつの・梁木　誠（嘱託）・澁谷麻友子（嘱託）

8　発掘調査の実施並びに本書の作成にあたっては、栃木県教育委員会の指導を受けるとともに、次の諸機関及び諸氏のご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表する。（敬称略、順不同）

栃木県立博物館、栃木県埋蔵文化財センター、秋元陽光、黒崎　淳、小森哲也

凡　　例

1　挿図の縮尺は、原則として遺構を1/80とし、遺物は1/3又は1/4で示した。また、遺物実測図番号は遺構平・断面図の番号及び図版の番号と一致する。

2　断面図基準線は標高であり、平面図の方位は磁北を示す。

3　遺構実測図の土層説明においては、次の略号を使用した。

ローム粒：LR、ロームブロック：LB、鹿沼パミス：KP、今市パミス：IP、炭化物：C

石：S、撹乱：K

4　挿図中の ▒ は赤彩、■ は黒彩を示す。

目　　次

・序
・例言
・凡例

Ⅰ　はじめに
　1　調査の経緯……1
　2　遺跡の環境……2
　3　古墳群の概要……4
Ⅱ　遺構
　1　墳丘と周溝……7
　2　葺石……9
　3　横穴式石室……9
　4　埴輪列……10
Ⅲ　遺物
　1　円筒埴輪・朝顔形埴輪……20
　2　形象埴輪……37
　3　その他出土遺物……58

Ⅳ　おわりに……61
・報告書抄録

挿　図　目　次

第1図　瓦塚古墳群周辺遺跡分布図……3
第2図　瓦塚古墳群古墳分布図……5
第3図　瓦塚古墳周辺測量図……11
第4図　瓦塚古墳出土遺物（1）……12
第5図　瓦塚古墳出土遺物（2）……13
第6図　瓦塚古墳石室見取図……13
第7図　第1調査区～第3調査区土層断面図…14
第8図　瓦塚古墳後円部葺石……16
第9図　墳頂部埴輪・須恵器出土状況図……18
第10図　人物埴輪出土状況図……19
第11図　円筒埴輪部位模式図……21
第12図　出土円筒埴輪（1）……22
第13図　出土円筒埴輪（2）……23
第14図　出土円筒埴輪（3）……24
第15図　出土円筒埴輪（4）……25
第16図　出土円筒埴輪（5）……26
第17図　出土円筒埴輪（6）……27
第18図　出土円筒埴輪（7）……28
第19図　出土円筒埴輪（8）……29
第20図　出土朝顔形埴輪……30
第21図　刷毛目集成図（1）……33
第22図　刷毛目集成図（2）……34

第23図　刷毛目集成図（3）……35
第24図　刷毛目集成図（4）……36
第25図　人物埴輪（1）……41
第26図　人物埴輪（2）……42
第27図　人物埴輪（3）……43
第28図　家形埴輪（1）……44
第29図　家形埴輪（2）……45
第30図　家形埴輪（3）……46
第31図　馬形埴輪……47
第32図　鞆形埴輪……47
第33図　大刀形埴輪……48
第34図　盾形埴輪……49
第35図　矛形埴輪……50
第36図　靫形埴輪（1）……51
第37図　靫形埴輪（2）……52
第38図　靫形埴輪（3）……53
第39図　靫形埴輪（4）……54
第40図　靫形埴輪（5）……55
第41図　靫形埴輪（6）……56
第42図　器種不明の形象埴輪……57
第43図　その他出土遺物（1）……59
第44図　その他出土遺物（2）……60

表目次

第1表　周辺の遺跡……4
第2表　瓦塚古墳群一覧表……6
第3表　円筒埴輪観察表……31
第4表　出土土器観察表……60
第5表　出土鉄鏃観察表……60

図版目次

PL 1　第1調査区全景、
　第1調査区周溝セクション
PL 2　第2調査区全景、
　第2調査区周溝内側立ち上がり
PL 3　第2調査区周溝セクション、
　第2調査区円筒埴輪列と葺石
PL 4　第3調査区全景、
　第3調査区周溝内側立ち上がり
PL 5　第3調査区円筒埴輪列と葺石、
　第3調査区周溝円筒埴輪列とセクション
PL 6　第4調査区全景、
　第4調査区周溝内側立ち上がり
PL 7　第5調査区円筒埴輪列、
　第6調査区周溝セクション
PL 8　C調査区調査風景、
　C調査区前方部コーナー
PL 9　第7調査区全景、
　第7調査区円筒埴輪列と葺石
PL10　第8調査区調査風景、
　第9調査区周溝セクション
PL11　後円部南東側の葺石調査風景、
　後円部南東側の葺石
PL12　前方部南東側の葺石、
　くびれ部南東側の葺石
PL13　後円部中央付近の攪乱状況、
　横穴式石室天井石の確認
PL14　横穴式石室天井石付近の調査風景、
　横穴式石室天井石全景
PL15　横穴式石室奥壁、横穴式石室玄門付近
PL16　横穴式石室羨道東側壁、横穴式石室墓道
PL17　後円部北東側円筒埴輪列、
　前方部南東側円筒埴輪列

PL18 前方部南東側人物埴輪出土状況、
前方部南東側人物埴輪1・10出土状況
PL19 墳頂部埴輪列調査風景、墳頂部埴輪列
PL20 墳頂部須恵器出土状況、
須恵器甕口縁部 破片、須恵器甕胴部破片
PL21 現地説明会風景
PL22 出土遺物（1）
PL23 出土遺物（2）
PL24 出土遺物（3）
PL25 出土遺物（4）
PL26 出土遺物（5）
PL27 出土遺物（6）
PL28 出土遺物（7）
PL29 出土遺物（8）
PL30 出土遺物（9）
PL31 出土遺物（10）
PL32 出土遺物（11）
PL33 出土遺物（12）

Ⅰ　はじめに

1　調査の経緯

宇都宮市の中心部から北方に約4㎞、長岡町内の丘陵上に所在する瓦塚古墳群は、円墳を主体とした40基以上の古墳（現存するのは約30基）で構成される市内最大規模の古墳群である。この主墳とされるのが瓦塚古墳（24号墳）で、古墳群中唯一とみられる前方後円墳である。この瓦塚古墳が注目されたのは古く、明治31年に発掘調査が行われ、翌明治32年には中央学界において「下野国河内郡長岡の古墳」（『東京人類学雑誌』第155号）としてその成果が発表されている。これによると墳丘から円筒埴輪列や人物埴輪等が確認されるとともに、凝灰岩積の横穴式石室からは馬具・武器・装身具・土師器・須恵器など多数の副葬品の出土が見られたとされる。また、昭和48年～50年にかけては、近隣で計画された大規模宅地造成（長岡ニュータウン）に伴い古墳群中の3つの円墳（32・25・26号墳）が発掘調査され、凝灰岩使用の横穴式石室や直刀などの出土が確認されている。一方、本墳については、平成3～4年に作新学院高等部社会研究部による墳丘測量調査が実施され、正確な現況規模に加え墳丘の二段築成・円筒埴輪列の位置及び葺石の存在等が明らかにされている。さらに平成7年には宇都宮市の史跡指定を受け、恒久的な保存が図られている。

このような中、平成9年、地元有志による瓦塚古墳群愛護会が結成され、地域の手で古墳を守り伝えようとする活動が開始された。この愛護活動は、やがて地元の中学生等も参加しての大規模なものとなり、清掃活動だけに止まらず、案内板の設置・遊歩道の整備・樹木の植栽等も検討されるものとなった。これを受けて宇都宮市としても、将来の公園整備等を見据えた確認調査の必要性を鑑み、平成13年度より3ヵ年計画で規模・構造を確認するための発掘調査を実施することとした。調査経過は以下のとおりである。

第1次調査　調査期間は平成13年7月31日～10月31日。確認調査の初年次ということで、先ずは墳丘全体をきれいに刈り払い、攪乱及び変形等の状況を確認した。その上で、本次の調査区としては、最も大きな攪乱坑が見られた後円部中央とそれに続く墳丘くびれ部南側付近を中心に設定することとした。この結果、後円部中央の攪乱は大規模な盗掘坑であり、横穴式石室の天井石に達していることが判明した。横穴式石室は天井石の除去が危険を伴うため内部の測量等は断念したが、羨門付近から南方に伸びる墓道を確認することができた。またくびれ部付近の調査では、部分的にではあるが、墳丘斜面を覆う葺石や墳端及び墳頂部に巡る円筒埴輪列さらには人物埴輪等も確認されている。

第2次調査　調査期間は平成14年7月28日～9月30日。前年の第1次調査に引き続き、墳丘規模確認のためのトレンチを設定するとともに、円筒埴輪列及び葺石の状況をさらに拡張して調査した。この結果、前方部前端中央と後円部後方中央で地山を成形した墳丘立ち上がりが確認され、全長が約48mであることが判明した。また、墳丘面の拡張調査においては、葺石は2段目の盛土部斜面全面に及んでいること、中段平坦部の円筒埴輪列はほぼ隙間無く置かれていたこと等が確認された。

第3次調査　調査期間は平成15年7月28日～12月19日。最終年次ということで、調査区の拡張は最小限に止め、初年次に一部確認されていた墳頂部の円筒埴輪列等の精査を行った。この結果、墳頂前方部にかけては墳頂平坦面を区画するように2列の円筒埴輪列が確認され、その内側からは形象埴輪や須恵器の破片等の出土もみられた。また、前方部東側のコーナーが確認されたことから、

墳丘の平面形状もほぼ明らかにすることができた。今回は整備のための確認調査ということから、調査終了後は円筒埴輪列等も極力原位置に残し、墳丘全体を覆土した。

2　遺跡の環境

（1）地理的環境

宇都宮市周辺地域は関東平野の北部に位置し、北西に広がる帝釈・足尾山地等へと移り変わる境界部付近を占めている。本古墳が立地する宇都宮丘陵は、これら北西山地帯から平野部へと樹枝状に伸びた丘陵の一つで、その南端は現在の宇都宮市街地北部に達している。宇都宮丘陵の主要基盤は西部の大谷丘陵と同じ凝灰岩層で、かつては「長岡石」として広く採掘されている。本古墳の南南西約0.5㎞に所在する横穴墓群の長岡百穴（県指定史跡）はこの基盤層に掘り込まれたものである。なお丘陵表層部は、田原・宝木ローム及び七本桜・今市・鹿沼軽石等の火山噴出物で覆われている。

本古墳が載る宇都宮丘陵南部の東西裾部には、田川及び釜川がそれぞれ南流している。本古墳からの直線距離は、東の田川までが約1㎞、西の釜川までが約1.7㎞といずれも比較的至近距離である。現在、釜川は宇都宮市街地で田川に合流し、田川は上三川町を抜け、下野市内で鬼怒川に合流している。なお本古墳の標高は約180mで、眼下に広がる田川水系水田面との比高差は約50mを測る。

（2）歴史的環境

本古墳が立地する宇都宮丘陵南部には、旧石器・縄文時代以降、多数の遺跡が確認（第1図・第1表）され、宇都宮市内でも遺跡密集地の一つである。ここでは特に弥生及び古墳時代について触れることにしたい。本古墳の北西約2.5㎞の野沢遺跡（2）は、明治27年に発掘調査された弥生中期の再葬墓の遺跡で、出土土器は本県弥生中期の標識土器となっている。また本遺跡や野沢北遺跡（5）では籾圧痕の付いた土器も確認されており、本地域で既に稲作が開始されたことを物語っている。

宇都宮丘陵南部の古墳は、その立地等から大きく3つの群に分かれる。まず丘陵中央部では、本古墳群を含め大塚古墳群（35）・大ジノ古墳群（34）・谷口山古墳群（28）及び長岡百穴古墳（26）等が一群を成している。この内、本古墳から南西約1.2㎞の大塚古墳群（35）の主墳は直径53.4mの大型円墳（二段築成）で、横穴式石室の形状等から6世紀後半の築造と推定されている。同古墳群では平成25年に円墳3基が発掘調査されているが、出土土器等からいずれも主墳に後続するものとみられている。なお本古墳の南西約0.5㎞の長岡百穴古墳（26）は、52基から成る横穴墓群で、形状等の特徴から7世紀代に築造されたものと考えられている。

次に本古墳の北東約1.7㎞、田川低地を挟んだ対岸丘陵の南端部には北山古墳群（16）が所在する。この古墳群は3つの前方後円墳と円墳数基で構成され、前方後円墳は南から権現山古墳（全長40m）・雷電山古墳（全長41m）・宮下古墳（全長43m）と、徐々に標高を増しながら並んでいる。いずれも後円部に横穴式石室を持つ前方後円墳で、石室の特徴や出土品等から6世紀前半から中葉にかけて築造されたものと推定されている。なお同丘陵上で北方約1.2㎞の高山古墳群（11）は現在数基の円墳を残すのみであるが、かつては多数の円墳が群在していたとされる。

最後は本古墳から約3.5㎞南方の宇都宮丘陵南端部で、御蔵山古墳（53）・八幡山公園古墳群（52）・祥雲寺境内古墳（51）・戸祭山兜塚古墳群（48）などが集中している。このうち県庁のすぐ北側にある御蔵山古墳は、平成4年の発掘調査により全長62mで三段築成の前方後円墳であることが確認され、

瓦谷町
瓦谷町
竹林町
中椎
中椎
戸部町
戸部町
長岡町
長岡
下長岡
上長岡
長岡
長岡

第１表　周辺の遺跡

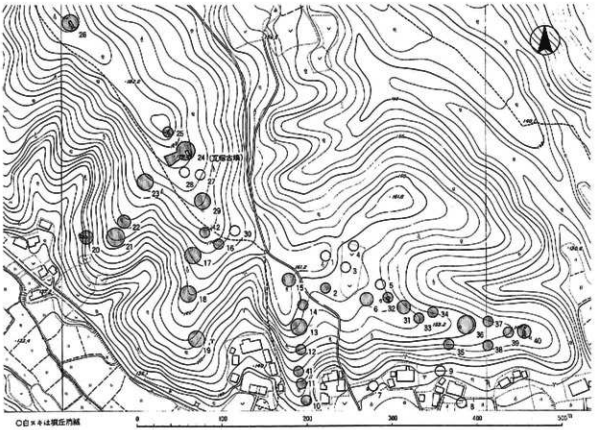
No.	遺跡名	種別	時代・内容等
1	瓦塚古墳群	古墳群	前方後円1、円墳40
2	野沢遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳
3	野沢石塚遺跡	集落跡	縄文・弥生
4	野沢向内遺跡	集落跡	縄文
5	野沢北遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳
6	桜畑遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳
7	広表遺跡	窯跡	奈良平安
8	欠の上遺跡	集落跡	縄文・古墳・奈良平安
9	欠の上窯跡	窯跡	奈良平安
10	千貫坊遺跡	城館跡	中世・近世
11	高山古墳群	古墳	円墳4
12	曽理部麗遺跡	集落跡	縄文・古墳
13	立野高塚群	塚	近世
14	瓦谷上の台遺跡	集落跡	古墳
15	北ノ館跡	城館跡	中世
16	北山古墳群	古墳	前方後円墳3・円墳4
17	関堀土用地遺跡	集落跡	古墳
18	浮ノ森古墳	古墳	古墳
19	道半塚供養塚群	塚	近世
20	権現山供養塚群	塚	近世
21	上戸祭北原遺跡	集落跡	縄文・古墳・奈良平安
22	上戸祭中ノ島遺跡	集落跡	縄文・古墳
23	上戸祭道越遺跡	集落跡	縄文
24	百穴原遺跡	集落跡	縄文・古墳
25	長岡百穴北古墳	古墳	古墳
26	長岡百穴古墳	横穴墓	古墳
27	長岡百穴南遺跡	集落跡	縄文・奈良平安
28	谷口山古墳群	古墳	円墳4
29	戸用地遺跡	集落跡	古墳
30	妙吉塚	塚	中世
31	北の前遺跡	集落跡	古墳・奈良平安・中世
32	前田遺跡	集落跡	古墳・奈良平安
33	三本松遺跡	集落跡	縄文
34	大ジノ古墳群	古墳	円墳9
35	大塚古墳群	古墳	円墳2
36	上戸祭大塚窯跡	窯業	奈良平安
37	松ヶ丘遺跡	集落跡	縄文・古墳
38	長山供養塚群	塚	近世
39	前坂供養塚群	塚	近世
40	姥ヶ入供養塚群	塚	近世
41	田向遺跡	集落跡	縄文・古墳
42	岩曽堀之内遺跡	集落跡	縄文
43	根河原瓦窯跡群	窯業	奈良平安
44	水道山瓦窯跡群	窯業	奈良平安
45	入畑窯跡群	窯業	近世
46	払面遺跡	集落跡	縄文
47	和尚塚	塚	中世
48	戸祭山兜塚古墳群	古墳	円墳5
49	戸祭兎田遺跡	集落跡	古墳
50	八幡山裏遺跡	集落跡	旧石器
51	祥雲寺境内古墳	古墳	前方後円墳1
52	八幡山公園古墳群	古墳	古墳
53	御蔵山古墳	古墳	前方後円墳

出土した埴輪や土器から６世紀前半の築造と推定されている。なお明治期の県庁建設に際して消滅した古墳が在ったこと等も記録に残されており、県庁周辺から八幡山公園・祥雲寺境内にかけては多くの古墳が散在していたものと思われる。

以上のように宇都宮丘陵南部では６世紀以降多くの古墳群が造営されており、本古墳及び古墳群もこうした環境を背景に築かれたものと言える。

３　古墳群の概要

本古墳群は、前述のとおり前方後円墳１基（24号墳）と多数の中・小円墳で構成されたものとみられる。第２図は昭和58年、現地踏査や取材等を元に作成された分布図で、当時消滅していたものも含め42基（第２表）が記載されている。古墳の分布は、丘陵南斜面を臨むように展開し、その範囲は東西約550m・南北約450mに及び、標高差は約50mを測る。



第２図　瓦塚古墳群古墳分布図

分布状況を細かくみると、樹枝状に伸びた尾根毎に複数の支群が形成されている様子が窺える。仮に主墳である前方後円墳（24号墳）を中心にみると、南南西に伸びる尾根上のA支群（20～23・25号墳）、南に伸びる尾根上のB支群（16～19・27～30・42号墳）、その東に平行して伸びる尾根上のC支群（10～15・41号墳）、少し離れて南東に伸びる尾根上のD支群（1～6・31～40号墳）等である。なお、北西尾根上の26号墳のように単独で支群を形成しないものやC支群とD支群に挟まれた谷間部の一群（7～9号墳）のように尾根筋からはずれたやや異質なものもみられる。

各支群を構成するのは中・小円墳であり、その規模は直径10mに満たないものから30mを超えるものまで様々である。仮に直径20mを小型と中型の境とすると、主墳の前方後円墳（24号墳）に隣接するA支群やB支群には中型が複数基みられるのに対し、主墳から離れたC支群やD支群では中型は１基のみで小型中心の構成となっている状況がみられる。

以上、本古墳群にはその分布・構成上いくつかの特徴がみられるが、それぞれの築造順序や群としての形成過程等については今後の資料の増加を俟たなければならない。

【参考文献】

宇都宮市教育委員会　1983『宇都宮の遺跡』
宇都宮市教育委員会　1985『瓦塚古墳群・日満遺跡ー長岡ニュータウン建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』
宇都宮市教育委員会　2017『宇都宮市遺跡分布図』

第２表　瓦塚古墳群一覧表

No.	墳形	規模(m)		内部主体	備考
		直径	高さ		
1			0.8		昭和45年桑園造成により墳丘消滅
2	円墳	8.5	0.8	横穴式石室	石室の一部露出
3				T字形横穴式石室	昭和46年桑園造成により墳丘消滅
4					昭和45年桑園造成により墳丘消滅
5				横穴式石室	石室を地下に残し墳丘消滅
6	円墳	16	2	横穴式石室	墳丘東半分が欠損し石室一部露出。墳頂に氏神鎮座
7					採土により墳丘消滅。鉄刀出土。
8				横穴式石室	昭和46年養蚕小屋建設のため墳丘消滅
9				横穴式石室	宅地化により墳丘消滅。石室の一部が残存。
10	円墳	12	2		
11	円墳	9.5	0.5	横穴式石室	石室の一部露出
12	円墳	7.5	0.5	横穴式石室	石室の一部露出
13	円墳	22	3		
14	円墳	14	2		
15	円墳	17	2.5		
16	円墳	10	1		
17	円墳	20	2.5		
18	円墳	23	2		
19	円墳	20	2		墳頂部に星の宮神社鎮座
20	円墳	15	1.5	横穴式石室	石室の一部露出
21	円墳	29	4		
22	円墳	16	1.4		
23	円墳	22	2		
24	前方後円墳	48	3.3	横穴式石室	明治31年発掘調査。埴輪、馬具、直刀、玉類、土器等出土
25	円墳	18	1.4	横穴式石室	昭和50年発掘調査。
26	円墳	40	5	横穴式石室	昭和50年発掘調査。直刀、鉾、鐔、鏃、刀子、轡片等出土
27	円墳	14	1		昭和47年桑園造成により墳丘消滅
28	円墳	12	1		昭和47年桑園造成により墳丘消滅
29	円墳	20	3		
30					昭和47年桑園造成により墳丘消滅
31	円墳	18	1.5		北半部が山道により一部欠損
32	円墳	14		T字形横穴式石室	昭和48年発掘調査。直刀、刀子、鐔、壺鐙金具等出土
33	円墳	10	2		東南部が山道により一部欠損
34	円墳	9.5	0.5		
35	円墳	13	2.5		西北部が山道により一部欠損
36	円墳	30	6		
37	円墳	7	1		昭和48年桑園造成により墳丘西北部消滅
38	円墳	10.5	1.5		
39	円墳	14	2.5		
40	円墳	18	3	横穴式石室	石室の一部露出。南に開口
41	円墳	8	0.5		
42	円墳	12	1.5		

Ⅱ 遺 構

1 墳丘と周溝

本古墳の調査では第１調査区から第９調査区、Ａ調査区、Ｂ調査区、Ｃ調査区、Ｄ調査区の13の調査区を設定し（付図）、調査した。Ａ調査区とＢ調査区以外のいずれの調査区も周溝の立ち上がり、および範囲を確認するために設けられた調査区である。なお、土層断面は第１調査区から第３調査区のみ記録した（第７図）。

（1）調査前の墳丘

本古墳はNE－SW主軸の前方後円墳である。明治31年の東京帝国大学による発掘調査時には墳丘上に２列の埴輪列が確認されたほか、石室内における副葬品の検出までされている。その後、たびたび盗掘を受けていたのか、平成３年の作新学院高等部社会研究部の測量調査時（第３図）には後円部の中心部分と前方部の前端で大きな攪乱が表面観察で確認された。特に後円部東側では石室石材が露出、散乱していた。また、表土層は薄く、円筒埴輪の上部が露出していた。本調査開始前には石室の奥壁直上の天井石が外されており、玄室は崩壊の可能性があった。なお、宇都宮市史によると本古墳は全長45m、前方部幅25m、後円部径20mと報告されている。それに対し、作新学院高等部社会研究部は全長50m、前方部幅35m、後円部径35mと報告している。

（2）調査区

第１調査区

墳丘の東側に設定した13.6m×2.0mの調査区。北側に8.8m×0.8mの先行トレンチを設定し、周溝の内側と外側の立ち上がりを確認した。この調査区で検出した周溝の幅は6.8mを測る。また、第１調査区西側延長線上の葺石のエレベーション図を記録した。

第２調査区

墳丘の南側に設定した17.4m×2.0mの調査区。北側で葺石と円筒埴輪の破片が検出された。東側に12.2m×0.6mの先行トレンチを設定し、周溝内側の立ち上がりを確認した。

第３調査区

墳丘の北側に設定したＡ調査区と連結した調査区。第３調査区自体は調査区南側にある葺石までを調査区の範囲とし、14.2m×2.0mの調査区である。また、調査区東側には16.4m×0.6mの先行トレンチを設定した。なお、周溝内側と外側の立ち上がりを確認し、周溝の幅を把握するために先行トレンチを北側に2.2m拡張した。調査区中央部からは円筒埴輪列が確認されている。この調査区で検出した周溝の幅は9.6mであった。また、第３調査区南側延長線上の葺石のエレベーション図を記録した。

第４調査区

墳丘の西側に設定した14.6m×2.0mの調査区。調査区北側に周溝の内側と外側の立ち上がりを検出するために13.6m×0.6mの先行トレンチを設定した。この調査区で確認できた周溝の幅は7.2mであった。

第５調査区、第６調査区、Ｃ調査区

墳丘の南西に設定した調査区。第５調査区と第６調査区は周溝内側の立ち上がりを確認するため、Ｃ調査区は前方部西側コーナー部の墳丘立ち上がりを検出するために設定した。第６調査区では周溝の内側と外側の立ち上がりを検出した。この周溝の幅は6.4mを測る。Ｃ調査区において周溝の内側のコーナーを確認することができた。

第７調査区

墳丘の西側に設定した12.0m×1.0mと6.6m×1.0mの２つの調査区。東側の調査区から葺石と円筒埴輪列が確認された。西側の調査区において、周溝の外側と内側の立ち上がりを検出した。

第８調査区、第９調査区

墳丘の南東側に設定された調査区。14.0m×1.0mの第８調査区と17.0×1.0mの第９調査区が直角に交わるように設定されている。第8調査区では周溝内側の立ち上がり、第９調査区では周溝の内側と外側の立ち上がりが検出された。この調査区で確認できた周溝の幅は狭く、3.3mを測る。

Ａ調査区

後円部からくびれ部までの葺石、埴輪列の確認を目的とした主体部を含む調査区。墳丘上段の葺石の施工方法を把握することができた。また、墳頂部においては並行した２列の埴輪列も確認された。

Ｂ調査区

前方部の葺石、埴輪列の検出を目的とした調査区。円筒埴輪列の内側に人物埴輪が３個体列をなして樹立していることを確認した。

Ｄ調査区

墳丘南東側に設定された凸形の調査区。前方部東側コーナー部の墳丘立ち上がりを確認した。

（３）墳丘

発掘調査以前は本古墳の全長や前方部幅、後円部径などはそれぞれ異なった数値で報告されていた。しかし、本調査で周溝の範囲を確認したところ、墳丘の全長は48m、前方部前端幅38m、後円部径は28mであることが確認された。

前方部と後円部の比高差はあまりなく、前方部墳頂の標高は183.4m、後円部墳頂の標高は184.2mである。主体部は後円部南東側に位置し、南東方向に開口している。墳丘上段には葺石が残存している。上段の裾部と墳頂部では埴輪列が確認されている。

（４）周溝

第１調査区、第２調査区、第３調査区の土層断面を確認すると、墳丘北側、東側、南側に地山を掘り込んで構築した周溝であることがわかった。また、これまでは周溝の幅は10m、深さは1.3mと報告されていたが、本調査では第３調査区で検出された周溝幅が9.6mで最も広く、第９調査区で検出された周溝幅3.3mが最も狭かった。周溝は地理的条件により、場所によって幅が変わっているとみられる。深さは1.0m内外の周溝であったことが各調査区において確認できた。本調査で設定した各調査区で周溝とみられる立ち上がりを確認できたことから、周溝は墳丘の周りを囲

繞していたと推測される。なお、周溝の形状は一重の盾形であったと推定される。また、周溝部からは土器などの遺物は検出されなかった。

2　葺石（第8図）

A調査区、B調査区、第2調査区、第3調査区、第7調査区の一部から葺石は検出されている。特にA調査区とB調査区においては葺石の施工方法を確認することができた。本古墳の葺石には河原の玉石が用いられている。後円部では後円の中央を中心として放射状に縦区画石列を設定し、その間にやや小ぶりな石を充填している。石列を配置する際、場所によっては規則正しく礫の長手面を揃えて置いている箇所もある。この縦区画石列の円弧の間隔は裾部付近で2.5m内外を測る。くびれ部から前方部においては、上段の葺石の裾部にやや大振りの石を用いた根石を配している。なお、本調査では葺石の断ち割り調査を行なっていないため、縦区画石列や根石が垂直に積まれていたのかは不明である。また、本古墳の葺石は上段にのみ施工されており、上段からの転落してきた石以外は下段から葺石は一切検出されていない。

3　横穴式石室（第6図）

奥壁の真上の天井石が外されており、その他の天井石が崩落する可能性があったため、玄室内に長い時間立ち入ることができず、石室内の側壁等の実測を行なわなかった。

『東京人類学会雑誌』第155号によると、本古墳の石室は凝灰岩を用いた両袖形の横穴式石室であるとされるが、当時のスケッチから疑似両袖式の石室であることが窺える。石室の全長は7.65m、羨道長2.1m、玄室長5.83mを測る。奥壁は凝灰岩の一枚岩で幅は1.33mである。玄室と羨道は框石によって区切られており、玄室の床面が羨道の床面よりやや低くなっている。なお、羨道部は床面に礫が敷かれていたようだ。玄室内の側壁は凝灰岩の長方形の切石を用いていたとされている。

また、本調査では羨道から玄門部までは立ち入ることができた。玄門は框石を挟んで両側に立柱石を立て、その上に高さを数十センチ下げて天井石を架け渡し、疑似楣石の構造を呈する。側壁には切石が用いられていたと報告されているが、本調査で写真撮影時に玄室内に立ち入った際に、割石の乱石積みであることを確認した。また、羨道部の側壁も凝灰岩の割石の乱石積みである。羨道の床面には玄室と羨道を閉塞していた扉石だと思われる平滑に仕上げられた凝灰岩の板石が倒れている。また、羨門部に立柱石は見受けられないが、墓道と羨道の境目に楣石を設置し、区画していたことが窺える。本古墳からは墓道も検出した。墓道の断面は台形状を呈しており、周溝部まで続くとみられる。

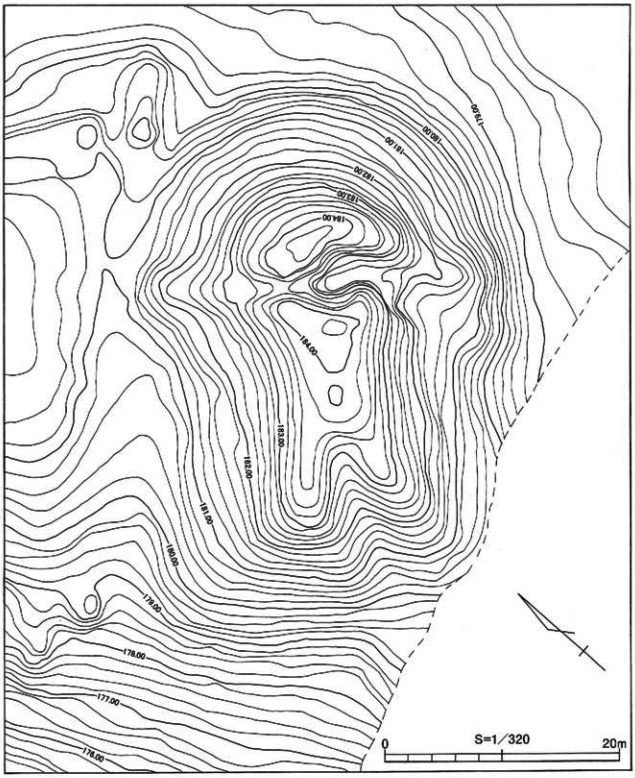
石室からの出土遺物は本調査では埴輪片と鉄鏃片である。明治31年の東京帝国大学による調査時は出雲石製管玉6点、水晶製切子玉7点、緒締玉1点、瑠璃製小玉12点、轡4組、兵庫鎖2点、雲珠5点、鉸具2点、直刀2点、刀子十数本、鍔1点、金環1点、鉄鏃十数点、土師器5点、須恵器1点を検出したと記録が残っている（八木1899）。また、石室の奥壁手前では丸石を1m程度積み上げた上におよそ60cm×45.5cmの板石が乗せられていたとも報告されている。屍床台にしてはサイズが小さいため、石棚の可能性もあるが、真相はわからない。

4　埴輪列（第９図、第10図）

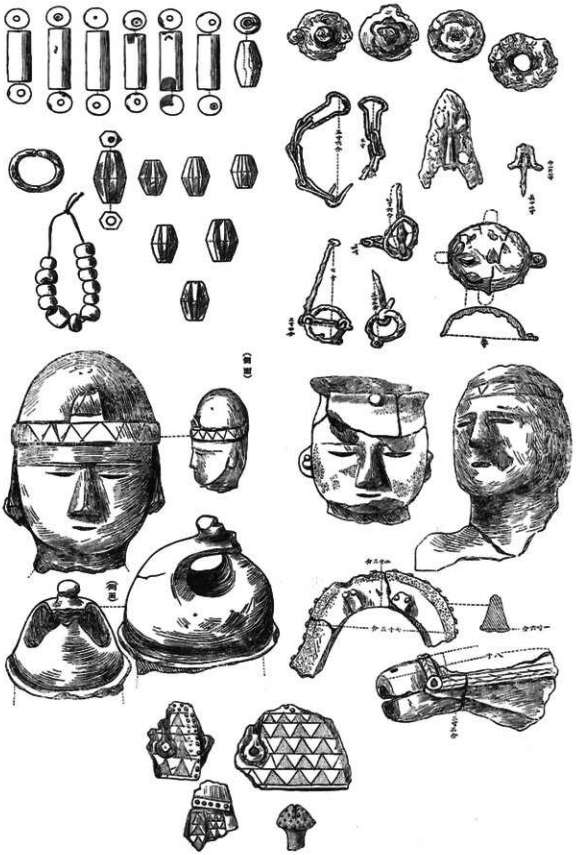
平成３年度の作新学院高等部社会研究部による調査では前方西側で円筒埴輪の列が確認されている。本調査では第２調査区北側、第３調査区南側、第５調査区北側、第７調査区東側、Ａ調査区、Ｂ調査区で埴輪列を検出し、埴輪は葺石の裾部に墳丘の周りを囲繞して樹立していたことがわかった。また、くびれ部付近の円筒埴輪列と葺石の間からは人物埴輪が３個体並べられた状態で出土した。いずれの人物埴輪も墳丘の外側を向くように置かれたとみられる。円筒埴輪や形象埴輪は墳丘中段の平坦面に並べられたが、テラス面の幅は狭く、なおかつ水平に整地されずに傾斜がかかっている。作新学院高等部社会研究部の調査ではこのテラス面の幅は２～３ｍと報告されていたが、本調査ではテラス面の幅は狭いところで１ｍ、くびれ部付近の広い所で２ｍ程度であることを確認した。墳丘中段の円筒埴輪の列は1.2mに３本の割合で置かれており、それぞれの間隔は口縁部が接触して樹立していたと考えられるほど狭いものである。後円部の周りに並べられた円筒埴輪は地山を掘り込んで設置され、基底部を据えた後、第１突帯付近までを他の土で充填したとみられる。作新学院高等部社会研究部の調査において円筒埴輪の外側の土は黒褐色土で、内側には黒色土を充填していることがわかっている。しかし、本調査では埴輪の周りを一つずつ個々に掘り込んで設置したのか、溝を掘り一括して設置したのかは確認できなかった。

前方部墳頂では、平行して並んだ二本の埴輪列を確認した。墳頂部の埴輪列は円筒埴輪だけでなく、器財埴輪も含まれていたことがわかった。この埴輪列の範囲は南北約10.5m、東西約３ｍを測る。埴輪列の間には東西方向に甕や甑、瓶類などの須恵器が並んで出土したことから、埴輪と共に並べられていたと推測できる。また、埴輪と須恵器を用いて何らかの区域を設けていたことが窺える。この前方部の埴輪列は後円部墳頂まで続くようであるが、盗掘による破壊で後円部墳頂における埴輪列は確認できなかった。

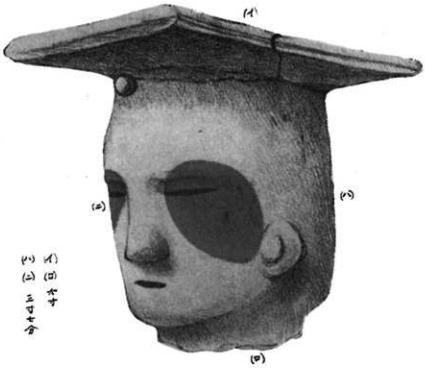
東京帝国大学の調査では前方部中央から主体部直上までを試掘している。この調査では前方部から後円部にかけて埴輪列が確認されていることから、後円部墳頂にも埴輪が列をなして弧を描いていたと考えられる。すなわち、墳頂部と中段のテラス面に埴輪が墳丘を囲むように並べられていたということである。また、この調査において、後円部墳頂の中心に大きな円筒埴輪が樹立していたと報告されている。後円部墳頂の円筒埴輪列はこの大円筒埴輪を囲むように並べられていたと推測される。



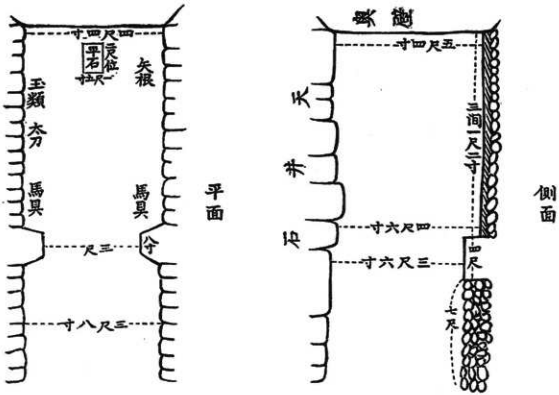
第３図　瓦塚古墳周辺測量図
（作新学院高等部社会研究部1991を一部改変）



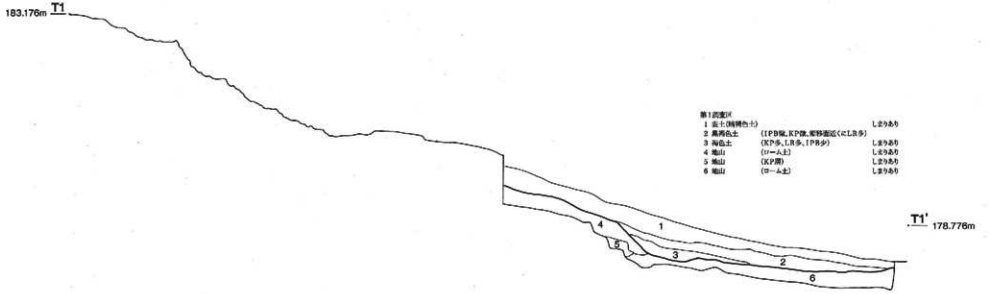
第４図　瓦塚古墳出土遺物（１）（八木1899より引用）

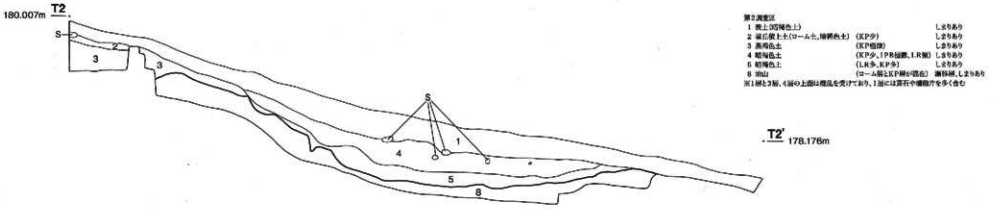


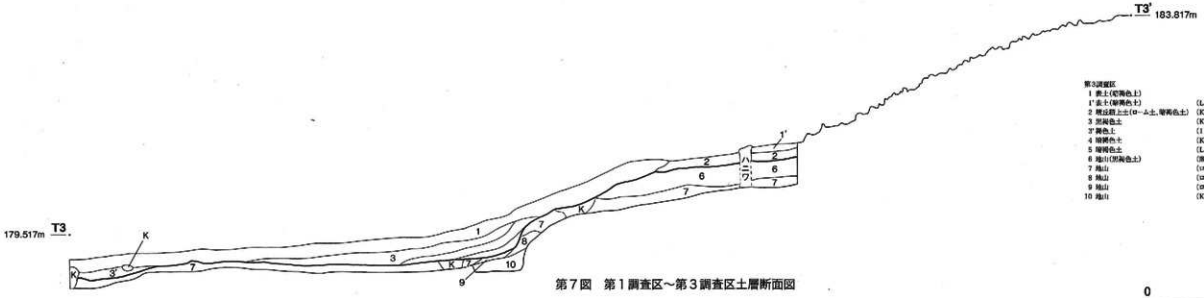
第５図　瓦塚古墳出土遺物（２）（八木1899より引用）



第６図　瓦塚古墳石室見取図（八木1899より引用）

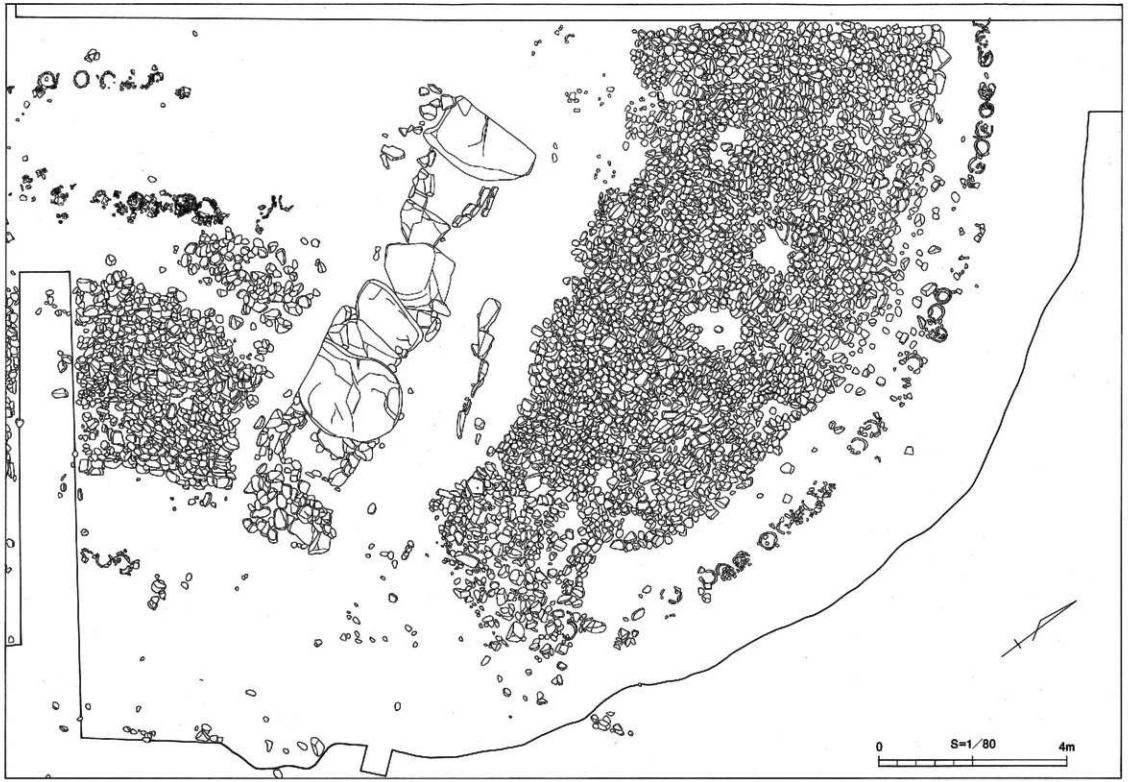




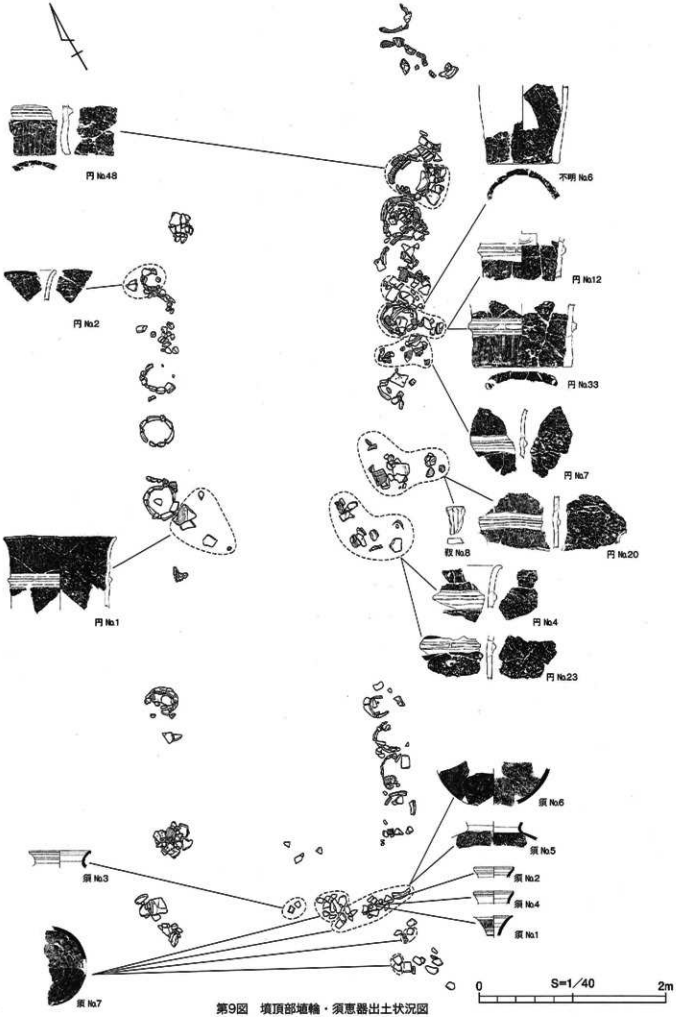


第7図　第1調査区～第3調査区土層断面図

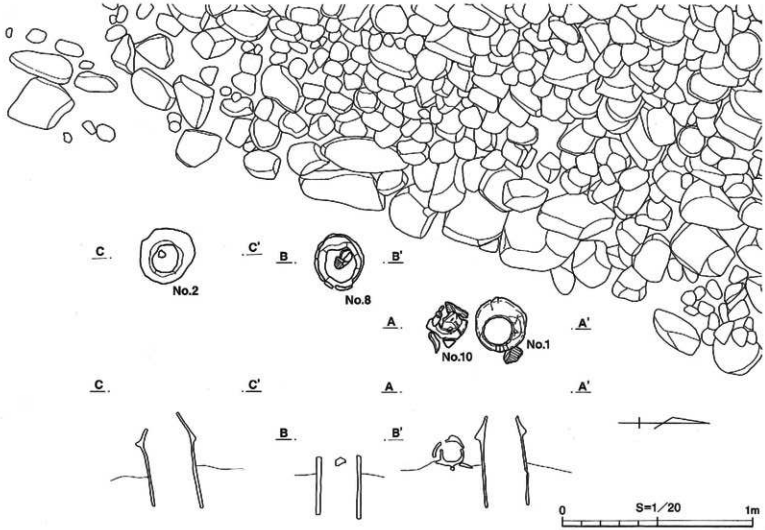
0　S=1/80　4m



第8図　瓦塚古墳後円部葺石（A調査区）



第9図　墳頂部埴輪・須恵器出土状況図



第10図　人物埴輪出土状況図

Ⅲ 遺 物

1 円筒埴輪・朝顔形埴輪（第12図～第24図）

多量の円筒埴輪が出土したが、破片が細かく、基底部から口縁部までを完全に復元できるものはなかった。本報告では接合してある程度形になった破片、特徴的な破片を図化した。なお、円筒埴輪か朝顔形埴輪か判別できないものは円筒埴輪として扱った。個々の詳細については観察表に示し、ここでは概観を述べる。

（1）円筒埴輪における成形と調整

本古墳で出土した円筒埴輪は基底部から口縁部が開くラッパ型と、あまり開かない寸胴型の２形態に大別できる。外面の全体に刷毛目を施してから突帯を胴部に巡らせ、撫でて貼り付けている。刷毛目は下から上に向かって縦方向、および斜め方向に施され、刷毛目の条数は２cmあたり８本～16本と個体によってさまざまである。本古墳の円筒埴輪製作においては10本、13本の刷毛目を多用したとみられる（第21～24図。なお、集成図は原寸である。）。また、円筒埴輪の製作に用いられた胎土は黒色砂粒と凝灰岩の白色砂粒が多く含まれている。焼成は良好なものが多く、全体的に橙褐色や黄褐色を発色している。

口縁部は３形態に大別でき（第11図）、Ａは先端部に平らにナデを施しているもの、Ｂは先端の外反がきついもの、Ｃは先端の中央部にナデを施しているもので、Ⅰはそのナデが浅いもの、Ⅱはナデが深いものの２つに細分化できる。

また、底部径が30cm内外の大きいものは寸胴型に多かったとみられる。底部には藁や棒状の圧痕が残っているものが多いことが窺える。また、幅10cm内外、厚さ２、３cm程の粘土板の端と端を合わせて筒状にしていることがわかる。底部は粘土をぽってりと重めに残しているものと、胴部に自然な厚さで引き延ばされているものと２種類に分けることができる。底部調整はなく、基底端部までタテハケがしっかり施されているものが多くみられる。

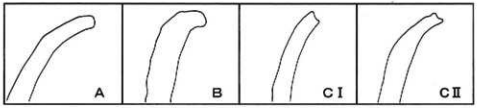
胴部の周りに貼り付けられている突帯にも違いがあることがわかった。突帯の形状は台形、M字形、三角形の３形態がある（第11図）。台形とM字形はそれぞれⅠ～Ⅲの形態に細分化でき、Ⅰは上下の稜が均等に突出しているもの、Ⅱは上の稜だけ突出しているもの、Ⅲは下の稜が突出しているものとしている。基底部から第１突帯までの幅は15cm内外、胴部の突帯間の幅は10cm内外になるように製作されたことがわかった。

また、透孔は円形、横長の楕円形、菱形と思われる四角形の３種類があるとみられる。本古墳の円筒埴輪は３条４段の円筒埴輪で、３段目に透孔が穿たれていたと推測できるが、場合によっては４条５段の円筒埴輪も存在したと考えられる。

（2）朝顔形埴輪における成形と調整

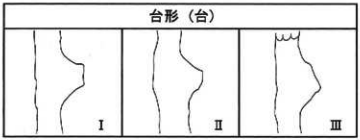
本調査で出土した朝顔形埴輪は主に肩部から口縁部にかけてのみ残存している。調整は外面に刷毛目、内面はナデを施している。口縁部付近の内面はヨコハケを施していることが窺える。朝顔形埴輪製作に用いられた刷毛目の条数は２cmあたり10本～14本で、円筒埴輪製作に用いられた工具と同じものであったと考えられる。肩部と口縁部の間のくびれ部分に突帯が一条、更にくびれ部と口縁部の間にも一条突帯が貼り付けられている。朝顔形埴輪製作に用いられていた胎土も円筒埴輪のものと同様、黒色砂粒と白色砂粒を多く含むものであった。色調は全体に橙色系や赤褐色を発色している。

口縁部の形状

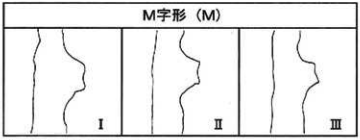


A:先端部を平らに成形している
B:先端部の外反がきつい
C:先端部の中央部をくぼませている
　Ⅰ:ナデの浅いもの
　Ⅱ:ナデの深いもの

突帯の形状



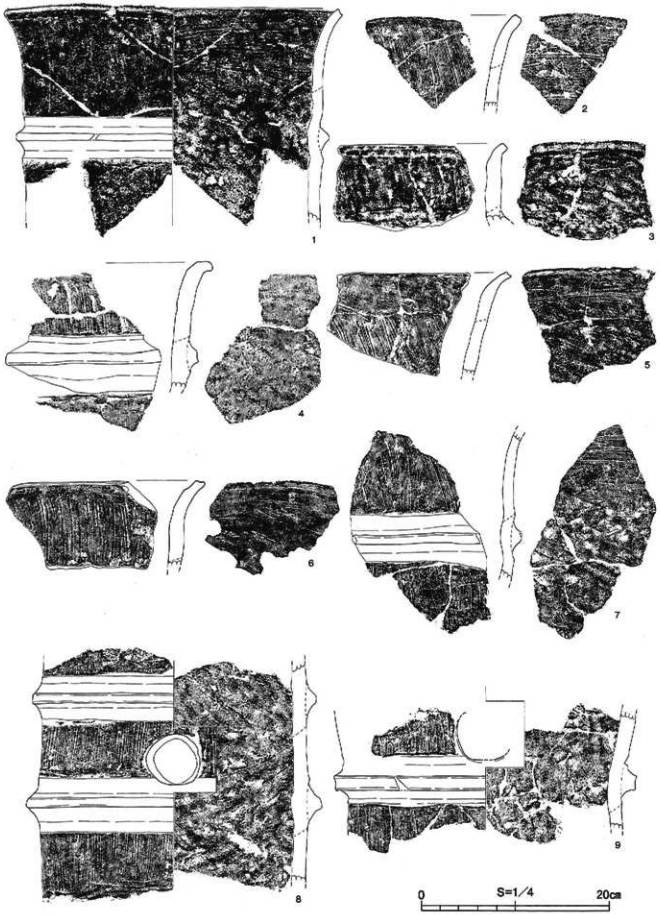
断面が台形を呈する
　Ⅰ:上下の稜が均等に突出
　Ⅱ:上稜が突出
　Ⅲ:下稜が突出



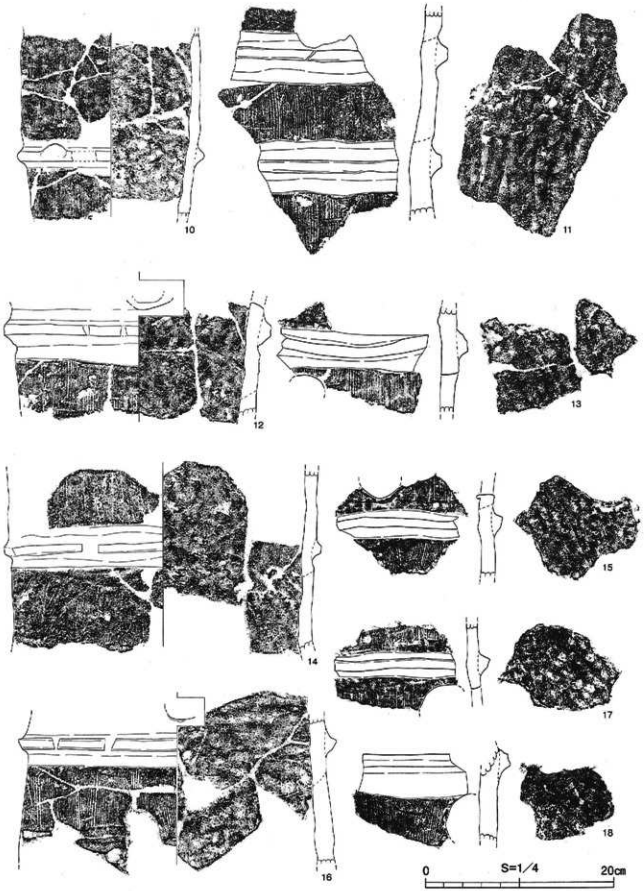
断面がM字形を呈する
　Ⅰ:上下の稜が均等に突出
　Ⅱ:上稜が突出
　Ⅲ:下稜が突出

断面が三角形を呈する

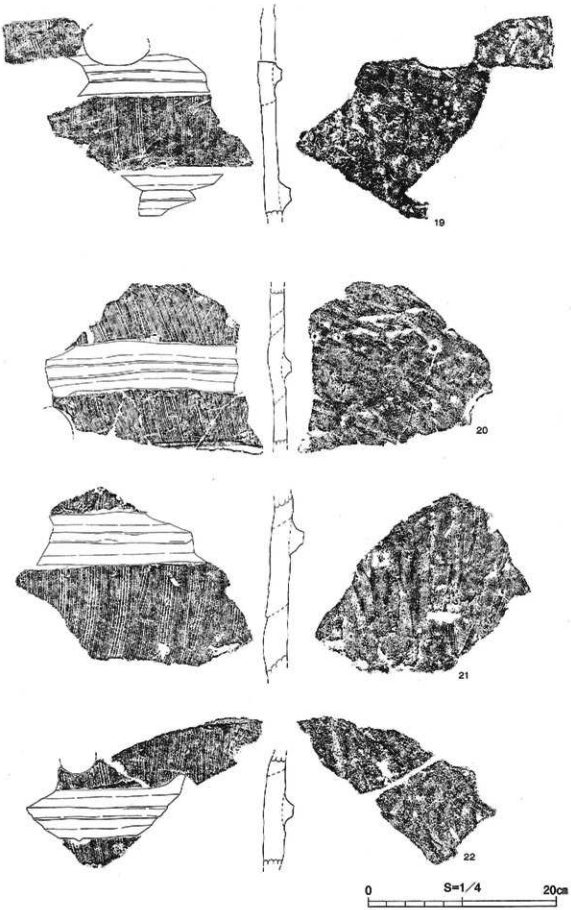
第11図　円筒埴輪部位模式図



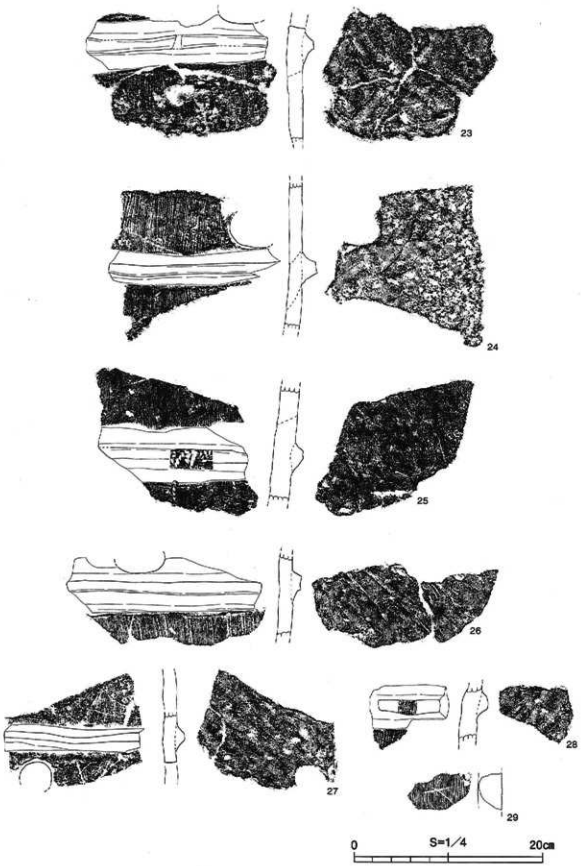
第12図　出土円筒埴輪（1）



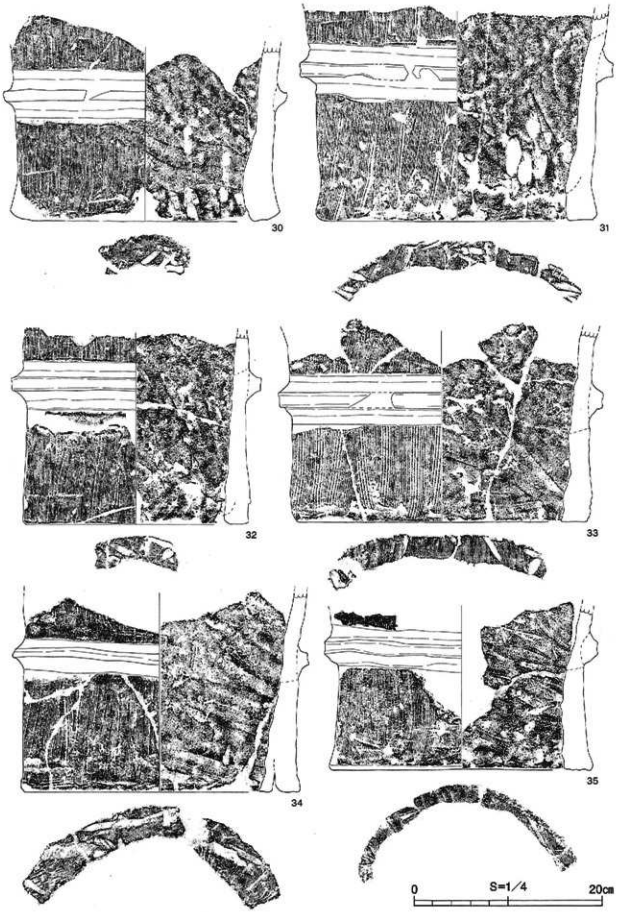
第13図　出土円筒埴輪（2）



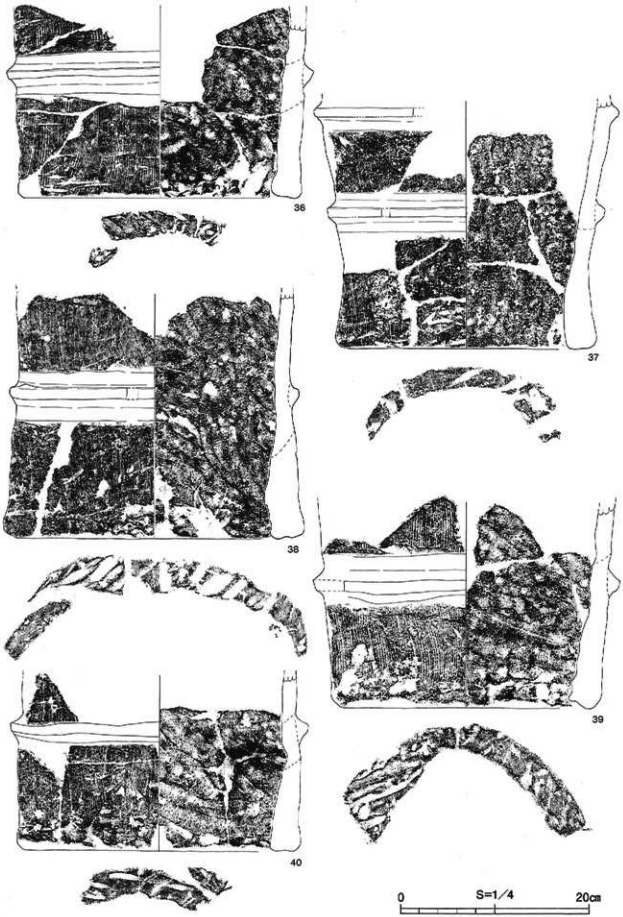
第14図　出土円筒埴輪（3）



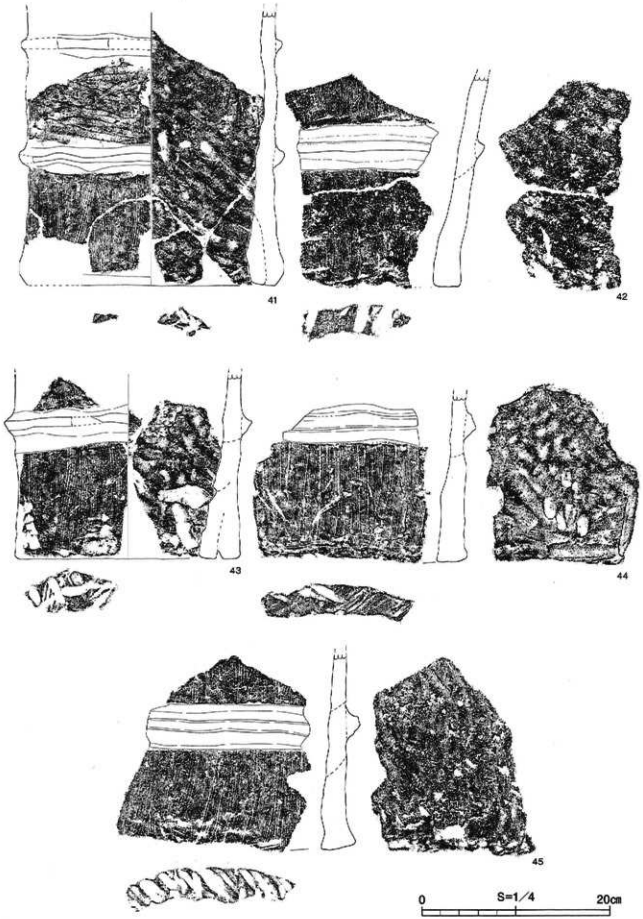
第15図　出土円筒埴輪（4）



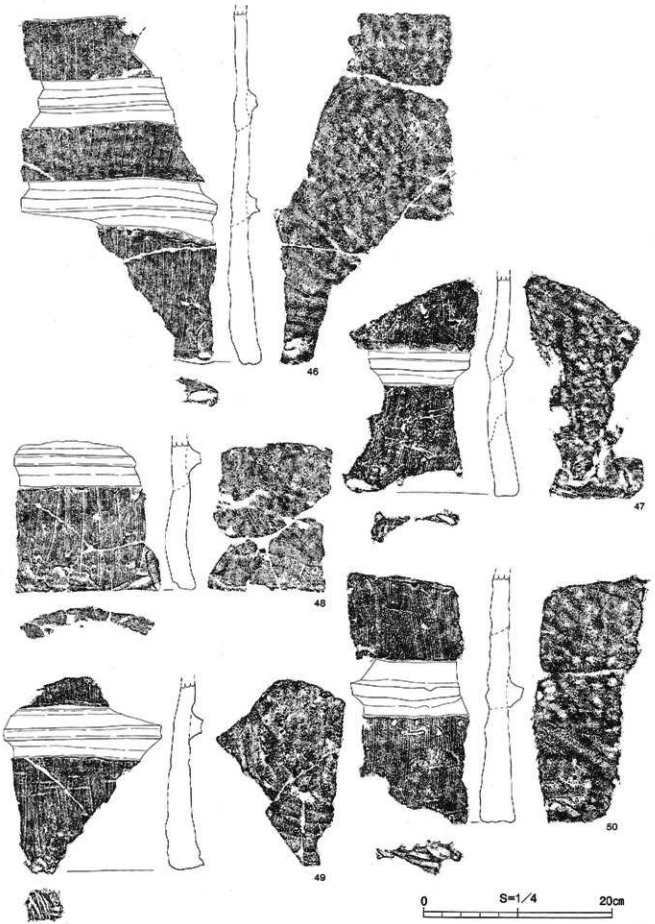
第16図　出土円筒埴輪（5）



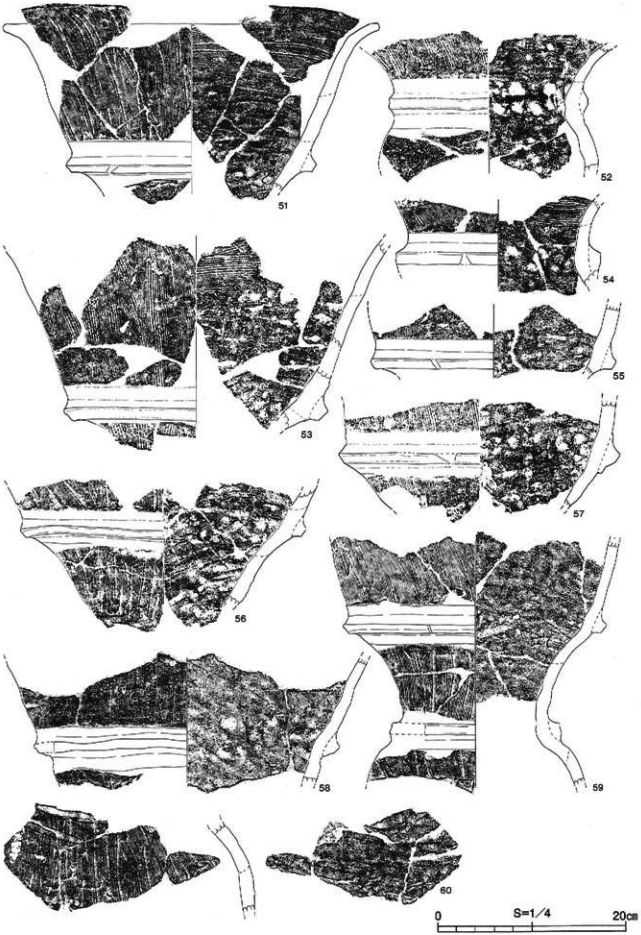
第17図　出土円筒埴輪（6）



第18図　出土円筒埴輪（7）



第19図　出土円筒埴輪（8）

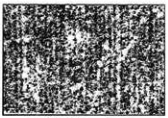


第20図　出土朝顔形埴輪

第３表　円筒埴輪観察表

No.	器種	法量（cm） （ ）内は残存数値		透孔	形態	調整（内・外） 刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	出土位置
1	円筒 （口縁部）	器高 口径 突帯高	(22.7) 36.0 1.0	－	C1 三	外：タテハケ、口唇部ヨコナデ 内：ナナメナデ、ヨコハケ 刷毛目：内外12本	淡褐色	白色細砂粒、黒色細砂粒、小石	普通	A調査区 墳頂部
2	円筒 （口縁部）	器高 口径	(9.7) 30.6	－	C1	外：ナナメハケ、口唇部ヨコナデ 内：ヨコハケ、口唇部ヨコナデ 刷毛目：内外13本	褐色	白色細砂粒、黒色細砂粒、赤色スコリア粒	良好	A調査区 墳頂部
3	円筒 （口縁部）	器高 口径	(8.2) 不明	－	B	外：タテハケ、口唇部ヨコナデ 内：ナナメナデ、口唇部ヨコナデ 刷毛目：9本？	橙褐色	白色細砂粒、黒色雲母砂粒	普通	墳頂部
4	円筒 （口縁部）	器高 口径 突帯高	(13.3) 不明 0.9	－	B MIII	外：タテハケ、口唇部ヨコナデ 内：ナナメナデ 刷毛目：8本	乳白色に近い淡褐色	白色細砂粒、黒色雲母砂粒、小石	普通	A調査区 墳頂部
5	円筒 （口縁部）	器高 口径	(10.8) 不明	－	C II	外：ナナメハケ、ヨコハケ、口唇部ヨコナデ 内：ナナメナデ、ヨコハケ、口唇部ヨコナデ 刷毛目：外13本、内16本	淡褐黄色	白色細砂粒、黒色雲母砂粒	良好	墳頂部 表採
6	円筒 （口縁部）	器高 突帯高	(9.1) 不明	－	C1	外：タテハケ、口唇部ヨコナデ 内：ナナメナデ、ヨコハケ 刷毛目：10本	橙褐色	細砂粒	普通	B調査区 下段
7	円筒 （胴部）	器高 突帯高	(15.7) 1.0	－	台I	外：タテハケ 内：ヨコハケ、ナナメナデ 刷毛目：内外12本	淡橙色	白色細砂粒、黒色雲母砂粒、小石	良好	A調査区 墳頂部
8	円筒 （胴部）	器高 突帯高	(23.3) 1.1～1.3	円	台III 台I	外：タテハケ 内：ナナメナデ 刷毛目：8本	赤褐色	白色細砂粒、黒色雲母砂粒、小石、赤色スコリア粒	良好	A調査区 中段
9	円筒 （胴部）	器高 突帯高	(12.6) 1.3	円	台I	外：タテハケ 内：ナナメナデ、ナナメナデ 刷毛目：16本	淡赤褐色	白色細砂粒、黒色雲母砂粒、輝石、赤色スコリア粒	良好	A調査区 中段
10	円筒 （胴部）	器高 突帯高	(19.5) 1.0	－	三	外：タテハケ 内：ナナメナデ 刷毛目：14本	乳白色	白色細砂粒、黒色雲母砂粒、小石	普通	A調査区 墳頂部
11	円筒 （胴部）	器高 突帯高	(21.6) 1.0～1.2	－	台I	外：タテハケ 内：タテナデ 刷毛目：10本	橙褐色	白色細砂粒、黒色雲母砂粒、砂粒	普通	第4調査区 中段
12	円筒 （胴部）	器高 突帯高	(12.1) 1.2	円？	MI	外：タテハケ 内：ナナメナデ 刷毛目：12本	橙色	白色細砂粒、黒色雲母砂粒、輝石、小石	良好	A調査区 墳頂部
13	円筒 （胴部）	器高 突帯高	(12.1) 1.1	円？	台II	外：タテハケ 内：タテナデ 刷毛目：10本	淡橙褐色	白色細砂粒、黒色雲母砂粒	普通	B調査区 中段
14	円筒 （胴部）	器高 突帯高	(20.2) 0.9	－	台I	外：タテハケ 内：ナナメナデ 刷毛目：不明	橙褐色	白色細砂粒、黒色雲母砂粒	普通	玄室埋土中
15	円筒 （胴部）	器高 突帯高	(11.1) 1.1	円？	台II	外：タテハケ 内：ナナメナデ 刷毛目：12本	淡橙褐色	白色雲母砂粒、黒色雲母砂粒	良好	墳頂部 表採
16	円筒 （胴部）	器高 突帯高	(15.6) 1.3	円？	台II	外：タテハケ、一部ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナナメナデ 刷毛目：10本	淡赤褐色	白色雲母砂粒、黒色雲母砂粒、輝石、赤色スコリア粒	良好	A調査区 中段
17	円筒 （胴部）	器高 突帯高	(9.0) 1.0～1.2	円？	台II	外：タテハケ 内：ナナメナデ 刷毛目：13本	淡橙褐色	白色細砂粒、黒色雲母砂粒	良好	墳頂部
18	円筒 （胴部）	器高 突帯高	(10.1) 0.8～1.0	円	MIII	外：タテハケ 内：ナナメナデ 刷毛目：10本	橙褐色	砂粒	良好	後円部 墳頂部
19	円筒 （胴部）	器高 突帯高	(22.3) 0.9～1.2	楕円	MIII	外：タテハケ 内：タテナデ、ナナメナデ 刷毛目：10本	淡褐黄色	白色細砂粒	普通	蓮池埋土中
20	円筒 （胴部）	器高 突帯高	(16.6) 0.8	円？	台III	外：タテハケ、ナナメハケ 内：ナナメナデ 刷毛目：13本	褐色	黒色細砂粒、白色雲母砂粒、赤色スコリア粒、小石	良好	A調査区 墳頂部
21	円筒 （底部）	器高 突帯高	(19.2) 1.3	－	台I	外：タテハケ 内：タテナデ 刷毛目：10本	褐色	白色細砂粒、黒色雲母砂粒、赤色スコリア粒、小石	良好	A調査区 中段
22	円筒 （胴部）	器高 突帯高	(11.6) 1.1	円？	台I	外：タテハケ 内：ナナメナデ 刷毛目：10本	淡褐色	白色細砂粒、黒色雲母砂粒、輝石、赤色スコリア粒、砂粒	良好	A調査区 墳頂部
23	円筒 （胴部）	器高 突帯高	(12.3) 1.1	円？	台I	外：タテハケ 内：ナナメナデ 刷毛目：10本	乳白色	白色細砂粒、黒色雲母砂粒、小石	普通	A調査区 墳頂部
24	円筒 （胴部）	器高 突帯高	(17.7) 1.5	円	台III	外：タテハケ 内：ナナメナデ 刷毛目：10本	淡橙褐色	砂粒	普通	墳頂部 表採
25	円筒 （胴部）	器高 突帯高	(12.1) 1.0	－	MI	外：タテハケ 内：ナナメナデ 刷毛目：10本	赤褐色	白色細砂粒、黒色雲母砂粒	良好	第7調査区 下段
26	円筒 （胴部）	器高 突帯高	(9.0) 1.0	楕円	台II	外：タテハケ 内：ナナメナデ 刷毛目：13本	淡赤褐色	白色細砂粒、黒色雲母砂粒、輝石、小石	良好	A調査区 上段
27	円筒 （胴部）	器高 突帯高	(12.8) 1.3	円	台I	外：タテハケ 内：ナナメナデ 刷毛目：不明	橙褐色	白色細砂粒、黒色雲母砂粒	普通	石室埋土中
28	円筒 （胴部）	器高 突帯高	(6.0) 1.0	－	台III	外：タテハケ 内：ナナメナデ 刷毛目：10本	淡赤褐色	白色細砂粒、黒色雲母砂粒、輝石、小石	普通	A調査区 中段
29	円筒 （胴部？）	器高	(3.9)	－	－	外：タテハケ 刷毛目：14本	橙褐色	白色細砂粒	良好	B調査区 下段
30	円筒 （底～胴部）	器高 底径 突帯高	(18.4) 25.8 1.1	－	台I	外：タテハケ 内：ナナメナデ 刷毛目：13本	淡赤褐色	白色細砂粒、黒色雲母粒、輝石、小石、赤色スコリア粒	良好	A調査区 中段

No.	器種	法量 (cm) ( )内は残存数値	遺孔	形態	調整(内・外) 脚毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	出土位置
31	円筒(底～胴部)	器高 (22.1) 底径 30.0 突帯高 1.5	－	MⅢ	外:タテハケ 内:ナナメナデ 脚毛目:13本	赤褐色	白色細砂粒、黒色細砂粒、赤色スコリア粒、小石	良好	A調査区中段
32	円筒(底～胴部)	器高 (20.2) 底径 24.0 突帯高 1.3	－	台Ⅰ	外:タテハケ 内:ナナメナデ 脚毛目:13本	淡赤褐色	白色細砂粒、黒色細砂粒、小石	良好	A調査区中段
33	円筒(胴部)	器高 (20.2) 底径 31.0 突帯高 1.3	－	MⅠ	外:タテハケ 内:ナナメナデ 脚毛目:10本	赤褐色	白色細砂粒、黒色細砂粒、小石	良好	A調査区 墳頂部
34	円筒(底～胴部)	器高 (21.0) 底径 29.7 突帯高 1.2	－	MⅢ	外:タテハケ 内:ヨコナデ、ナナメナデ 脚毛目:13本	橙褐色	白色細砂粒、黒色細砂粒、赤色スコリア粒	良好	B調査区中段
35	円筒(底～胴部)	器高 (17.4) 底径 28.0 突帯高 1.0～1.2	－	MⅠ	外:タテハケ 内:ヨコナデ、ナナメナデ 脚毛目:13本	橙褐色	細砂粒	良好	B調査区下段
36	円筒(底～胴部)	器高 (20.2) 底径 30.0 突帯高 1.1	－	台Ⅱ	外:タテハケ 内:ナナメナデ 脚毛目:12本	橙褐色	白色細砂粒	良好	第3調査区中段
37	円筒(底～胴部)	器高 (25.1) 底径 27.9 突帯高 0.9～1.0	－	台Ⅱ	外:タテハケ 内:ナナメナデ 脚毛目:13本	淡赤褐色	白色細砂粒、黒色細砂粒	普通	第8調査区 周溝内
38	円筒(底～胴部)	器高 (26.1) 底径 31.9 突帯高 0.9	－	三	外:タテハケ 内:ナナメナデ 脚毛目:13本	淡褐色	白色細砂粒、黒色細砂粒、細砂粒	普通	第2調査区 周溝内
39	円筒(底～胴部)	器高 (16.6) 底径 28.8 突帯高 1.2	－	台Ⅱ	外:タテハケ 内:ナナメナデ 脚毛目:8本	橙色	砂粒、白色細細粒、赤色スコリア粒	普通	後円部 墳頂部
40	円筒(底～胴部)	器高 (18.5) 底径 30.0 突帯高 1.4	－	台Ⅱ	外:タテハケ 内:ナナメナデ、ヨコナデ 脚毛目:12本	淡橙褐色	砂粒	良好	墳頂部 表採
41	円筒(底～胴部)	器高 (28.9) 底径 28.0 突帯高 0.8～1.0	－	三	外:タテハケ、ヨコナデ 内:ナナメナデ 脚毛目:10本	淡橙褐色	白色細砂粒	良好	石室埋土中
42	円筒(底～胴部)	器高 (22.4) 底径 1.0	－	三	外:タテハケ 内:ナナメナデ 脚毛目:13本	乳白色	白色粗砂粒、黒色細砂粒	普通	第2調査区 周溝内
43	円筒(底～胴部)	器高 (19.5) 底径 23.9 突帯高 1.1	－	三	外:タテハケ 内:ナナメナデ 脚毛目:10本	橙褐色	白色粗砂粒、黒色細砂粒	普通	玄室埋土中
44	円筒(底～胴部)	器高 (17.5) 底径 1.1	－	台Ⅲ	外:タテハケ 内:ナナメナデ、一部ヨコナデ、タテナデ 脚毛目:12本	橙褐色	砂粒	良好	後円部 墳頂部
45	円筒(底～胴部)	器高 (20.8) 底径 40.0? 突帯高 1.5	－	台Ⅲ	外:タテハケ 内:ナナメナデ 脚毛目:13本	橙色	黒色粗砂粒、白色細砂粒	良好	第8調査区 周溝内
46	円筒(底～胴部)	器高 (37.4) 突帯高 1.0～1.3	穿孔?	MⅢ	外:タテハケ 内:ナナメナデ 脚毛目:13本	淡橙色	白色細砂粒、黒色彩砂粒	普通	玄室埋土中
47	円筒(底～胴部)	器高 (23.3) 突帯高 0.9	－	台Ⅱ	外:タテハケ 内:ナナメナデ 脚毛目:8本	橙褐色	砂粒	普通	後円部 墳頂部
48	円筒(胴部)	器高 (15.7) 底径 29.6? 突帯高 1.1	－	MⅢ	外:タテハケ 内:ナナメナデ 脚毛目:12本	褐色	白色細砂粒、黒色細砂粒、赤色スコリア粒	良好	A調査区 墳頂部
49	円筒(底～胴部)	器高 (20.0) 突帯高 1.3	－	MⅢ	外:タテハケ 内:ヨコナデ、タテナデ 脚毛目:13本	淡赤褐色	白色細砂粒、黒色細砂粒、小石	良好	A調査区中段
50	円筒(底～胴部)	器高 (26.3) 突帯高 1.5	－	台Ⅱ	外:タテハケ 内:ナナメナデ、ヨコナデ 脚毛目:10本	橙色	黒色細砂粒、白色細砂粒、砂粒、赤色スコリア粒	良好	墳頂部 表採
51	朝顔(頸～口縁部)	器高 (17.7) 口径 40.0 突帯高 1.3	－	A 台Ⅰ	外:タテハケ、ナナメナデ、口縁部ヨコナデ 内:ヨコハケ、ヨコナデ、口縁部ヨコナデ 脚毛目:12本	乳白色	白色細砂粒、黒色細砂粒	普通	第2調査区 周溝内
52	朝顔(胴部?)	器高 (13.3) 突帯高 0.8	－	台Ⅰ	外:ナナメハケ 内:ヨコナデ、ナナメナデ 脚毛目:10本	橙色	白色細砂粒、黒色細砂粒、赤色スコリア粒	普通	第7調査区中段
53	朝顔(胴部)	器高 (20.1) 突帯高 1.2	－	台Ⅱ	外:タテハケ 内:ヨコナデ、ヨコハケ 脚毛目:内外10本	淡橙色	白色細砂粒、黒色細砂粒、赤色スコリア粒	普通	第2調査区上段
54	朝顔(胴部)	器高 (9.2) 突帯高 1.3	－	台Ⅱ	外:ナナメハケ 内:ヨコハケ、ヨコナデ 脚毛目:外12本、内不明	淡褐色	白色細砂粒、黒色細砂粒	良好	第2調査区 周溝内
55	朝顔(胴部)	器高 (7.5) 突帯高 1.2	－	台Ⅱ	外:タテハケ 内:ヨコナデ 脚毛目:不明	橙色	白色細砂粒、黒色粗砂粒、細石、小石	普通	A調査区上段
56	朝顔(胴部)	器高 (12.5) 突帯高 1.0	－	台Ⅰ	外:タテハケ、ナナメハケ 内:ヨコナデ 脚毛目:12本	乳白色	白色細砂粒、黒色細砂粒	普通	第2調査区上段
57	朝顔(胴部)	器高 (11.5) 突帯高 1.2	－	MⅢ	外:ナナメハケ 内:ナナメナデ 脚毛目:10本	赤褐色	白色細砂粒、黒色細砂粒、細砂粒	普通	第8調査区 周溝内
58	朝顔(胴部)	器高 (13.5) 突帯高 1.0	－	台Ⅱ	外:タテハケ 内:ナナメナデ 脚毛目:13本	橙褐色	砂粒、白色細砂粒、黒色細砂粒	普通	墳頂部
59	朝顔(頸～口縁部)	器高 (25.9) 突帯高 0.7～1.1	－	台Ⅱ	外:ナナメハケ 内:ヨコナデ 脚毛目:14本	淡赤褐色	白色粗砂粒、黒色細砂粒、赤色スコリア粒、小石	良好	A調査区中段
60	朝顔(胴部?)	器高 (9.6)	－	－	外:タテハケ 内:ヨコナデ 脚毛目:13本	暗赤褐色	白色粗砂粒、黒色細砂粒	良好	第1調査区上段

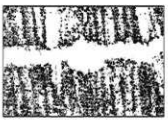

円筒埴輪1　外面

円筒埴輪1　内面

円筒埴輪2　外面

円筒埴輪2　内面

円筒埴輪3　外面

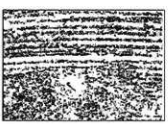

円筒埴輪4　外面

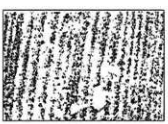
円筒埴輪5　外面

円筒埴輪5　内面

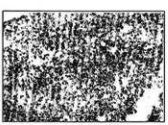
円筒埴輪6　外面

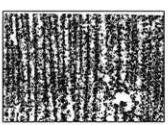
円筒埴輪7　外面


円筒埴輪7　内面


円筒埴輪8　外面

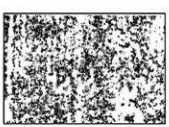
円筒埴輪9　外面


円筒埴輪10　外面


円筒埴輪11　外面

円筒埴輪12　外面

円筒埴輪13　外面

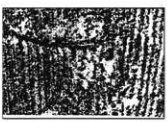

円筒埴輪14　外面

第21図　刷毛目集成図（1）

円筒埴輪 15　外面

円筒埴輪 16　外面

円筒埴輪 17　外面


円筒埴輪 18　外面

円筒埴輪 19　外面

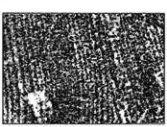
円筒埴輪 20　外面

円筒埴輪 21　外面

円筒埴輪 22　外面

円筒埴輪 23　外面

円筒埴輪 24　外面


円筒埴輪 25　外面

円筒埴輪 26　外面

円筒埴輪 27　外面

円筒埴輪 28　外面

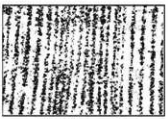
円筒埴輪 29　外面

円筒埴輪 30　外面

円筒埴輪 31　外面

円筒埴輪 32　外面

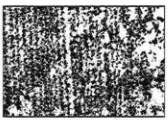
第22図　刷毛目集成図（2）


円筒埴輪 33　外面

円筒埴輪 34　外面

円筒埴輪 35　外面

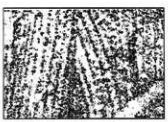
円筒埴輪 36　外面


円筒埴輪 37　外面

円筒埴輪 38　外面

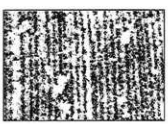
円筒埴輪 39　外面

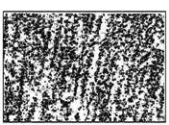
円筒埴輪 40　外面

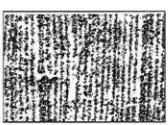

円筒埴輪 41　外面

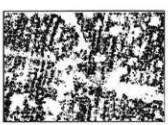
円筒埴輪 42　外面

円筒埴輪 43　外面


円筒埴輪 44　外面

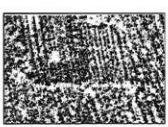

円筒埴輪 45　外面


円筒埴輪 46　外面


円筒埴輪 47　外面

円筒埴輪 48　外面

円筒埴輪 49　外面

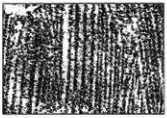

円筒埴輪 50　外面

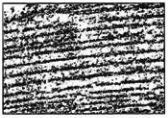
第23図　刷毛目集成図（3）

朝顔形埴輪 51　外面

朝顔形埴輪 51　内面

朝顔形埴輪 52　外面


朝顔形埴輪 53　外面


朝顔形埴輪 53　内面

朝顔形埴輪 54　外面

朝顔形埴輪 54　内面

朝顔形埴輪 55　外面

朝顔形埴輪 56　外面

朝顔形埴輪 57　外面

朝顔形埴輪 58　外面

朝顔形埴輪 59　外面

朝顔形埴輪 60　外面

第24図　刷毛目集成図（4）

2　形象埴輪

人物埴輪（第25～27図）

人物埴輪の各部位の形式は稲村分類（稲村1999）、赤彩については市毛分類（市毛1984）を参考にした。

基底部から上衣裾部まで残存するものが３点出土している。いずれも墳丘のくびれ部付近から出土しており、３点は並んで樹立していたことが出土状況からわかっている。１は残存高50.5㎝で、縦５㎝、横3.7㎝の楕円形の透孔が穿たれている。正面中央部には帯状に赤彩が施されており、腰紐を表現していたことが窺える。鏡などを模したものを粘土で貼りつけ、その周りに赤彩を塗布していたと考えられる。２は残存高58.9㎝で、縦4.7㎝、横3.9㎝の楕円形の透孔が穿たれている。８は残存高45.3㎝で円形の透孔が穿たれている。１の腰紐の赤彩が人物の正面に当たる部分に施されていたと仮定した場合、北東を向いて樹立していたことが出土状況から把握できる。また、１・２・８はいずれも円筒部に配された透孔が北を向くように置かれていたこともわかっている。したがって、２・８も１と同様に墳丘の外側を向いておかれていたと推定すると、残存している部分は背面部分であるといえる。３～７はいずれも下げ美豆良で、３は左側の美豆良、４は右側の美豆良である。どちらもⅡＣ２の形式の逆Ｔ字状を呈しており、赤彩を用いて紐が巻きついているように表現されている。５は左右不明のＬ字状の美豆良か、形式はⅡＤ１である。なお、赤彩などの装飾は見受けられない。６は左右不明で３・４と同様な赤彩が施されている。また、木芯中空法を用いて下部を取りつけた痕跡がある。７も左右不明である。この個体は粘土棒に細い粘土紐を巻きつけ、下部には五角形の粘土板を貼りつけたもので、他の美豆良とは違った方法で作られている。また、赤彩は全体に施されている。９は後頭部か。全体を黒く塗り、赤彩で斜めに線が一本描かれている。また、耳の剥離痕と思われる個所にも赤彩が塗布されており、耳を貼りつけたのちに耳の裏もしくは耳の周りに着色したと推測できる。他にも頸部と思われるところにも赤彩が施されており、首飾りを表現したと考えられる。10は人物頭部で、１の足元から出土したことから同一個体の可能性が高い。目と口はヘラのようなものを表側から差し込んで細いアーモンド状に穿孔したとみられる。また、目の上の粘土をつまみ上げて眉を高くしている。ⅡＢ１にあたる半月状の粘土板を側頭部に垂直に貼りつけた耳が右側のみ残存しており、後ろから支えるように粘土を貼り足している。さらに、耳の後ろには何らかの剥離痕があることから、耳飾りなどの装飾品を耳の後ろに貼りつけていたと推測される。髻は平坦で中央部分がくの字状にくびれた形を呈する。上面全体をハケで調整したのち、縁を撫でており、環状にした粘土紐の中央部分を押しつぶした形態の元結を有する。髻はＩＡ３、元結はⅡＢの形式にあたる。この人物頭部は両眼の周囲から両頬にかけて三角形に、額と髻の接着部分に一文字に、そして元結に赤彩が施されている。なお、顔面の赤彩に関してはⅢのＣの形式にあたる。また、額にはかんざしの表現があったのか、丸く剥離痕が残っている。11は髻または大きめの元結と考えられ、上部には赤彩が施されている。12は元結か。全体を赤く塗っており、10の元結と同じ形態のものとみられる。13～21は首元で首飾りの表現がされている破片である。16・19・21以外はいずれも細い粘土紐を撫でつけてから粘土粒を貼りつけており、丸玉と勾玉を交互に配したⅡＨＣｂ４形式の首飾りになっている。粘土紐は首飾りの紐を表現しているのか、赤彩も施してある。16は丸玉のみを配するＩＢａ１形式の首飾りを付したものである。18は肩口に腕を押入した痕が残っている。22～

25は腕で、いずれも中実である。22と23は手の甲の部分であるとみられる。26は坏である。底部に貫通した孔が確認できることから底部穿孔を模した、あるいは坏を人物の手などに固定するために木の小枝などを刺していたと考えることができる。坏の内側にはわずかに赤彩が残存している。27は大刀の柄部分か。中心に一文字の線刻があり、二段の鋸歯状線刻を施して赤彩を塗布している。両端の剥離痕から、柄頭、柄、刀部はそれぞれ別々に作られ、後で貼り合わせられたと考えられる。28は上衣裾部である。透孔と帯状の赤彩がわずかにだが、見受けられる。赤彩は1と同様、腰紐の表現か。人物埴輪は首元の破片から考慮すると、少なくとも6個体は存在していたと考えられる。また、人物埴輪片の多くはB調査区内から出土していることから、人物埴輪の大半が墳丘のくびれ部付近に並べられたと推測される。

家形埴輪（第28図～第30図）

1～4は竪魚木である。1・2は完形品で全体に赤彩が施されている。5～12は屋根の破片である（8～10は不明）。いずれも鋸歯状の線刻が施され、赤彩を塗布している。11と12は屋根裾のコーナー部分であり、端部にボタン状の粘土塊を貼りつけて装飾している。13～17は壁のコーナー部分である。17以外は縦方向の突帯と横方向の突帯の交点に装飾を施している。13・14・15はドーナツ状の粘土を貼りつけた装飾、16はボタン状の粘土を貼りつけた装飾となっている。また、これらの断面から構造を見ると、縦方向の突帯を貼りつけてから横方向の突帯を貼りつけ、その交点に装飾用の粘土を付随させていることがわかる。18～21は壁である。18・19にはわずかではあるが、窓の表現とみられる四角形の透孔の角が確認できる。また、18は突帯の上に斜めに撫でて調整をしている様子を見ると、切妻造りの家形埴輪で、屋根に接していた箇所に近い妻の壁の一部分であることがわかる。19も同様のものと考えられるが、明確にはわからない。22～24は家形埴輪の基底部である。いずれもかなり平らなつくりであることから、四角形に近い底部形を呈していたことがわかる。家形埴輪は壁の破片の装飾から思案すると、最低でも2個体は存在していたと推測できる。なお、その中に切妻造りの家が含まれるかは不明である。また、家形埴輪の破片の大半は後円部墳頂付近、またはA調査区北側上段から出土している。このことから、家形埴輪は後円部墳頂に樹立していた可能性が考えられる。

馬形埴輪（第31図）

1は頭部である。鋲留を配した面繋は幅2㎝弱の粘土帯の上に粘土粒を貼りつけて表現している。側面には目を模した透孔が穿たれている。2は頭部側面である。破片上部にはわずかに目を模した透孔の一部が確認できる。目の下には面繋を表現した粘土帯が貼りつけられていたとみられる剥離痕があり、下部には赤彩が残存している。また、その剥離痕の下には手綱を模した粘土紐が貼りつけられており、赤彩が施されている。3・4は鈴で、どちらも中実である。4はヘラ状の工具で一文字に刻んで鈴口を表現していることがわかる。5は辻金具である。目の透孔と耳の透孔がわずかに残存している。粘土帯を貼りつけたのち、金具を模した四角い粘土板をのせている。また、その粘土板には二条の線が刻まれており、その線刻付近と粘土帯に赤彩を施している。6は雲珠である。尻繋を模した粘土帯の上に鈴をのせ、その周りに環状に粘土紐を貼りつけたものである。環状の粘土紐には粘土粒が付随しており、その粘土粒にさらに細めの粘土紐が取りつ

けられていたことがわかる。尻繋と環状の粘土紐には赤彩が施されている。７は３段以上の鋸歯文が線刻で刻まれた障泥である。鋸歯には赤彩が施されている。また、馬形埴輪の破片は第１調査区から出土しているほか、Ｂ調査区や玄室埋土から出土している。このことから、馬形埴輪は数個体あり、墳丘の東側を中心に並べられていたことが想像され、人物埴輪群とともにくびれ部付近に並べられていた可能性もある。

鞆形埴輪（第32図）

１は鞆の先端部分か、鋸歯状に線刻されている。また、赤彩が施されているが、規則的に塗布されているのかは不明。２・３は胴部であるが、２は外形の線を刻んでから鋸歯状に線刻を施している。３は同心円状に数本の線刻を施してからその外側に鋸歯文を刻んでいる。鞆型埴輪片は後円部墳頂やＡ調査区中段からの出土である。また、東京帝国大学の調査時には鞆の部分がほぼ完形の鞆形埴輪が検出されている。スケッチを見る限りでは無紋のものであったようだ。

大刀形埴輪（第33図）

１～６は勾金である。１は三輪玉が２つ残存しており、三輪玉が剥離した痕跡が一か所残っている。側面と三輪玉の周りに赤彩を施している。２・３は同一個体であり、２はその端部である。どちらも半球状の粘土塊を装着したのち、三輪玉に巻きつけるように粘土紐を貼りつけ、その交点と屈曲点に鋲留を模した粘土粒を配している。また、粘土紐と勾金の側面に赤彩を施している。４～６は三輪玉以外の剥離痕は認められないことから、１と同じ形態の勾金であったことが推測される。７～９は三輪玉であり、７は完形品である。勾金の形態から、大刀形埴輪は少なくとも推定３個体存在していたといえる。また、大刀形埴輪片のほとんどが墳頂部や第７調査区から出土している。このことから、大刀形埴輪は墳丘の西側に樹立していたと推測できる。

盾形埴輪（第34図）

破片のものが多く、盾形であると断言できるものは少ない。本稿では端部を主に扱うが、いずれも鋸歯状に線刻を施し、鋸歯に赤彩を塗布しているもの、あるいは縁に沿って帯状に赤彩を施しているものが大多数である。２は翼部と胴部の接着部分であり、赤彩と黒彩が塗布されている。５・６は全体にヘラ調整を施し、縁だけを撫でた痕跡がある。また、反対側の面の縁には赤彩が施されており、非常に丁寧なつくりである。盾形埴輪の破片は墳頂部を中心に、Ａ調査区やＢ調査区から多く出土している。このことから、盾形埴輪は墳頂部の埴輪列として並べられたと考えられる。

矛形埴輪（第35図）

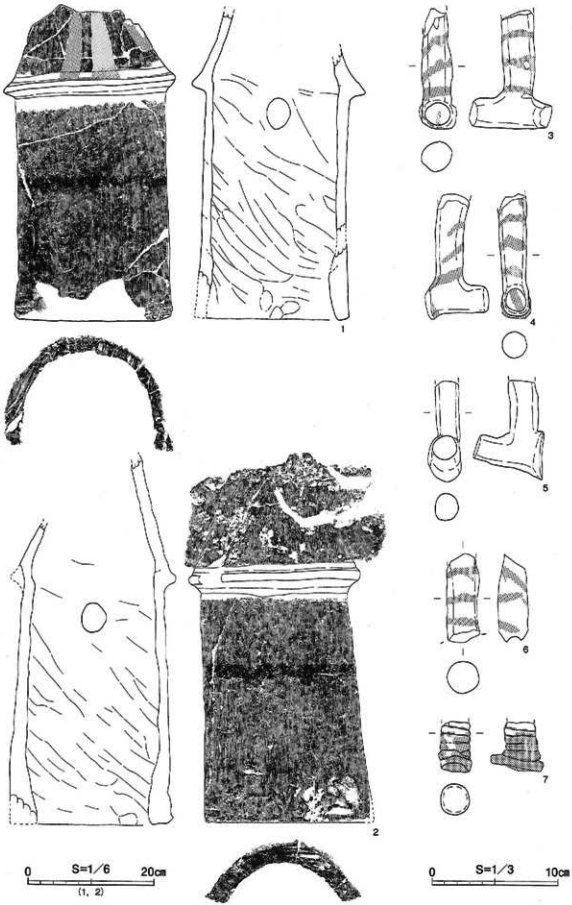
１は鋒から袋部まで残存している。また、表面のごく一部に赤彩が残存している。２は切先部分である。矛形埴輪片は後円部付近から出土していることから、盾形埴輪等と一緒に埴輪列に並べられたと推測できる。

靫形埴輪（第36図～第41図）

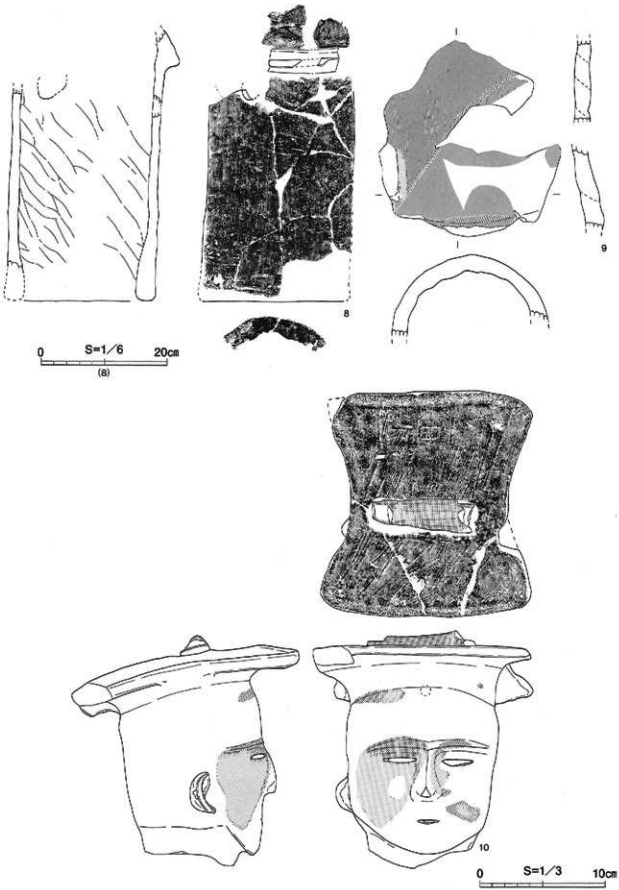
1は鏃部や翼部、背負紐の一部が残存している。翼部のつけ根に2本の線を刻み、その内側を赤彩して背負紐を表現している。上部には方形の粘土板を貼りつけ、線刻を施して鏃を表現している。その下部には鈴留を表す粘土粒を配した幅広の粘土帯を貼りつけている。2は矢筒下段部である。正面全体に3段の鋸歯文が線刻されており、鋸歯には赤彩を施している。上端部には粘土帯を横向きに貼りつけ、全周させていると考えられる。この粘土帯にも赤彩が残存している。また両脇には縦方向に突帯を配し、上部の粘土帯とこの突帯の交点付近に透孔が穿たれている。鋸歯文最下段下部にも横方向に突帯が付随し、側面の突帯下部にも透孔を配している。3～10は鏃を表現した線刻が刻まれている方形粘土板である。3は鏃表現が13本で、側面に赤彩を施している。4～7は側端に縦方向に粘土紐を貼りつけ、さらにその上に鈴留表現の粘土粒を配している。鏃表現については4が7本、5が11本、6が残存4本、7が6本である。3・4・6・9の鏃身部は↑なのに対し、8は↑、10は凵で表現されている。11・12は鈴留を表現した粘土粒を配した粘土帯である。どちらも上部に鏃を表現した線刻が施されており、裏面には方形粘土板の接合痕も残っている。それぞれ粘土粒が残存しており、11に関しては黒彩が施されている。13～23は胴部と翼部の破片である。背負紐は線刻で輪郭を刻んでから赤彩を施したことが窺える。また、翼部の側面も赤彩で着色したことが確認できる。24～33は矢筒上段と下段の間に貼り付ける粘土帯である。いずれも粘土帯の幅は5～6㎝程度であることがわかる。25・26・27・28・29・30は赤彩と黒彩が交互に塗られていたと考えられる。また、25・26・27・28・32には粘土帯下部に線刻が施されていることが確認でき、いずれも鋸歯状の線刻であったことが窺える。34は鈴留の表現がされた粘土帯であったのか、粘土粒が4つ残存している。さらに下部には他の個体と同様に鋸歯状の線刻が施されている。35～40は矢筒下段の胴部の破片である。これらもいずれも鋸歯状の線刻が施された上に赤彩が塗布されている。41～49は矢筒部分の縦方向の突帯の破片である。44・45は突帯に粘土粒を貼りつけた装飾が施されている。他はみな装飾のない突帯であるが、どの形態でも突帯付近には透孔を穿いていたことが窺える。靫形埴輪は鏃の表現のある方形粘土板を考慮すると、少なくとも6個体は存在していたと推測できる。また、靫形埴輪の破片の大半がA調査区南側とB調査区から出土しているほか、前方部墳頂の埴輪列近辺からも出土している。このことから、靫形埴輪は墳頂部の埴輪列として並べられたとみられる。

器種不明の形象埴輪（第42図）

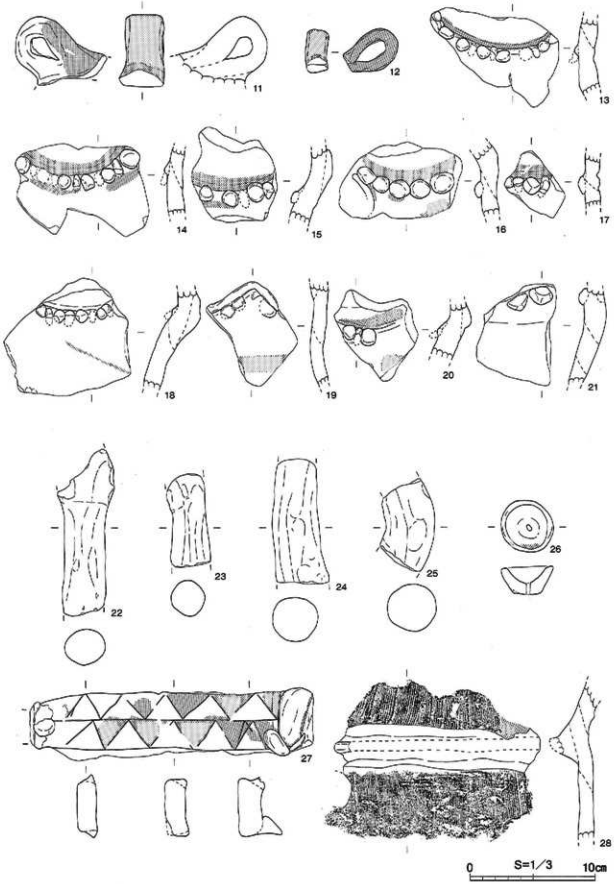
1は帽子の鍔か。壺形・器台形埴輪の可能性もある。鋸歯文が線刻で施されており、赤彩が塗布されている。端部の厚みは薄く、外反している。2は人物埴輪が持つ靫か。翼部とみられる部位には赤彩が施されている。3は鋸歯文が線刻で施され、赤彩が塗布されている盾の破片か。4は人物の足の甲か。透孔が見受けられる。5は器種不明であるが、何かの端部である。鋸歯文線刻が施されている。6は形象埴輪の基底部である。



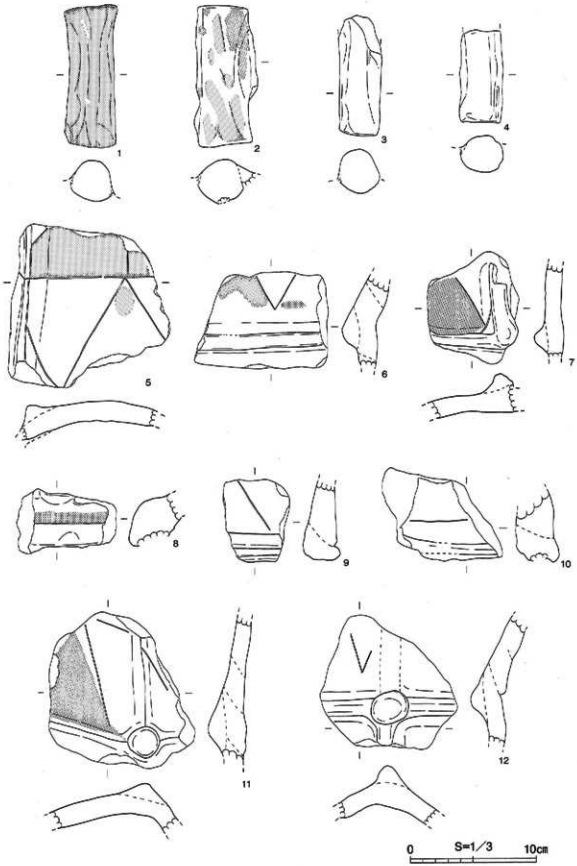
第25図　人物埴輪（1）



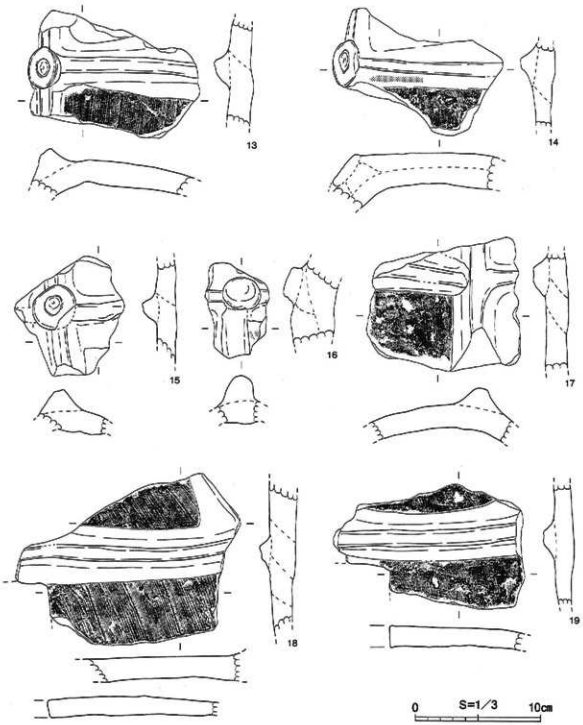
第26図　人物埴輪（2）



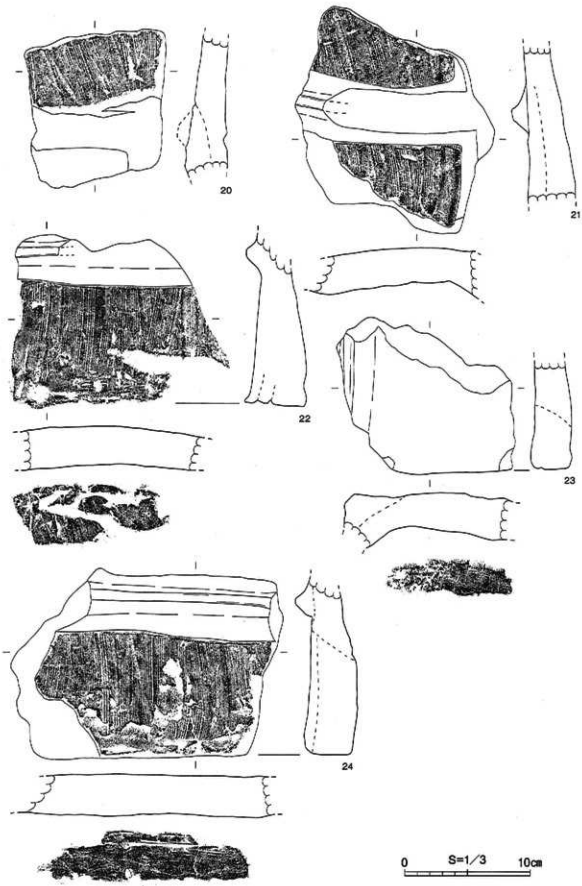
第27図　人物埴輪（3）



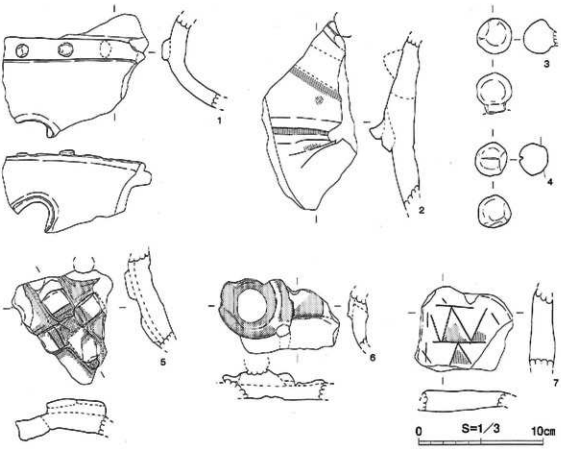
第28図　家形埴輪（1）



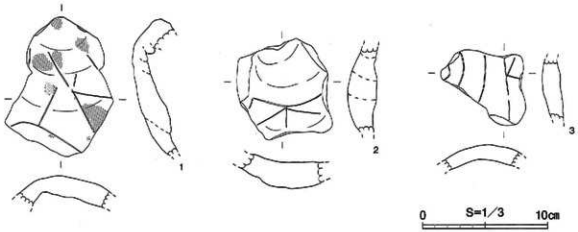
第29図　家形埴輪（2）



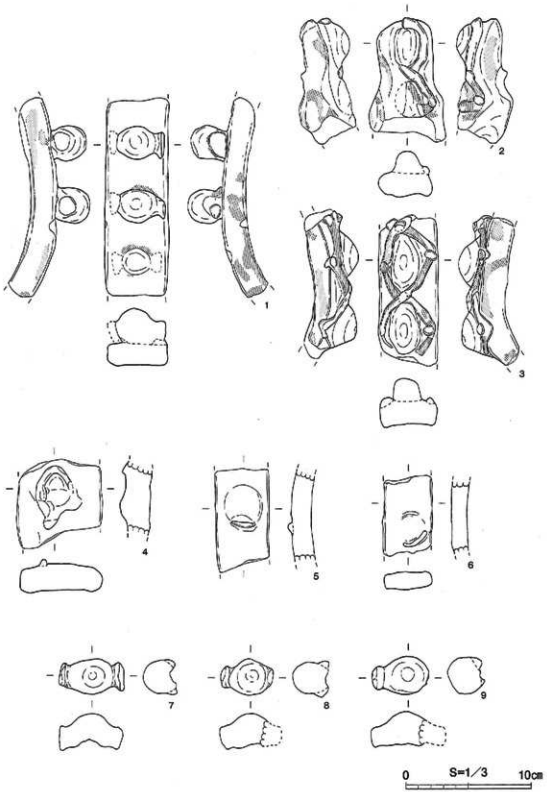
第30図　家形埴輪（3）



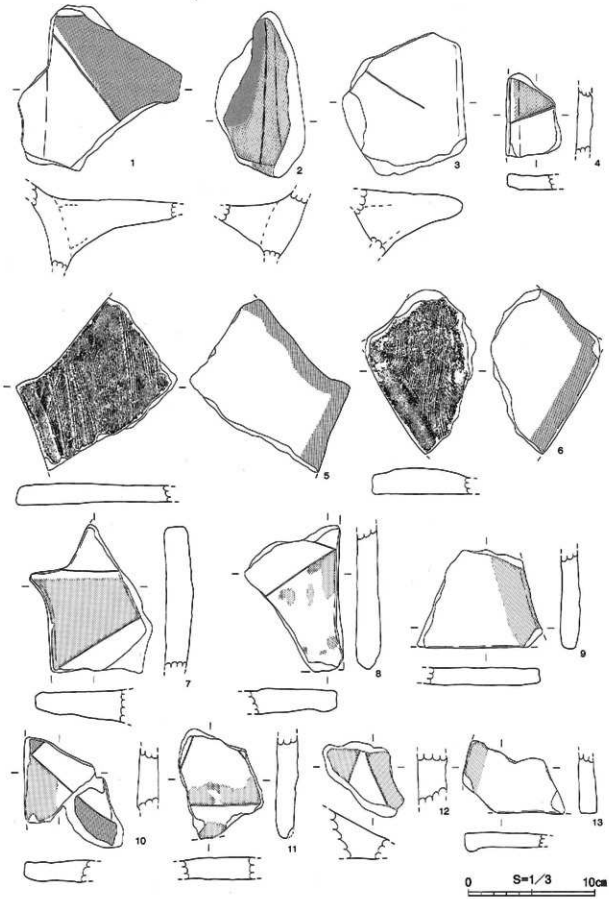
第31図　馬形埴輪



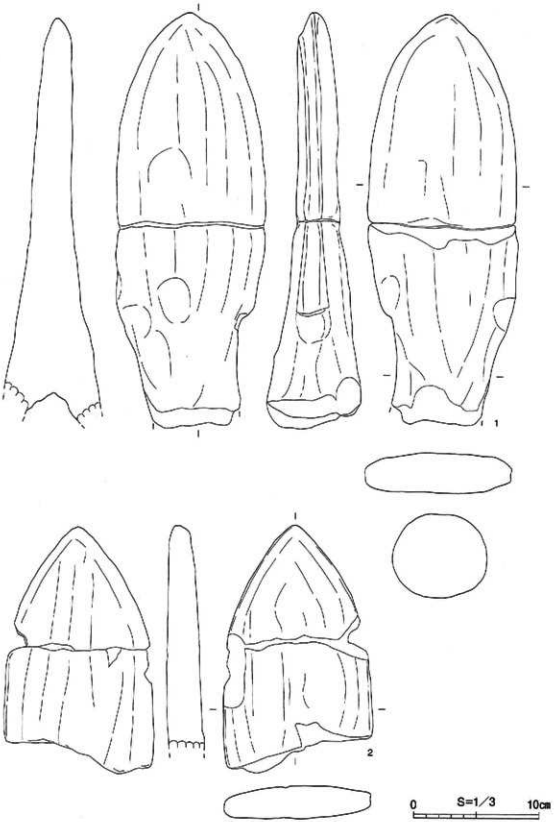
第32図　鞍形埴輪



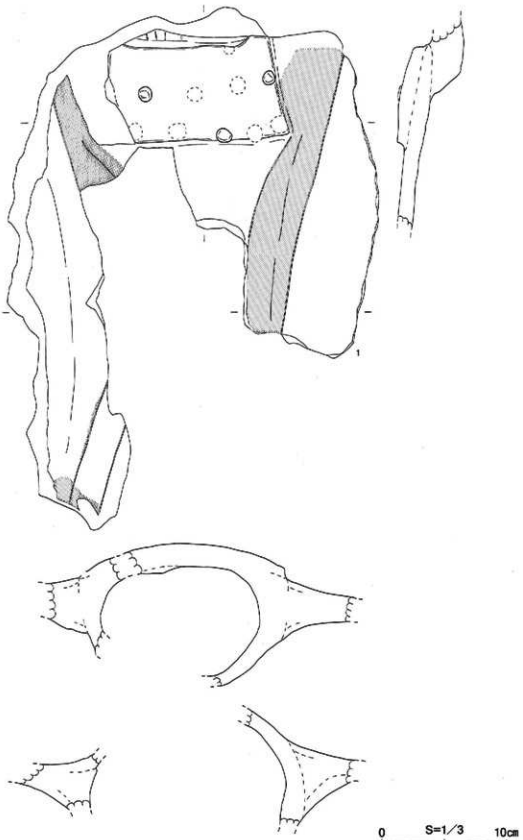
第33図　大刀形埴輪



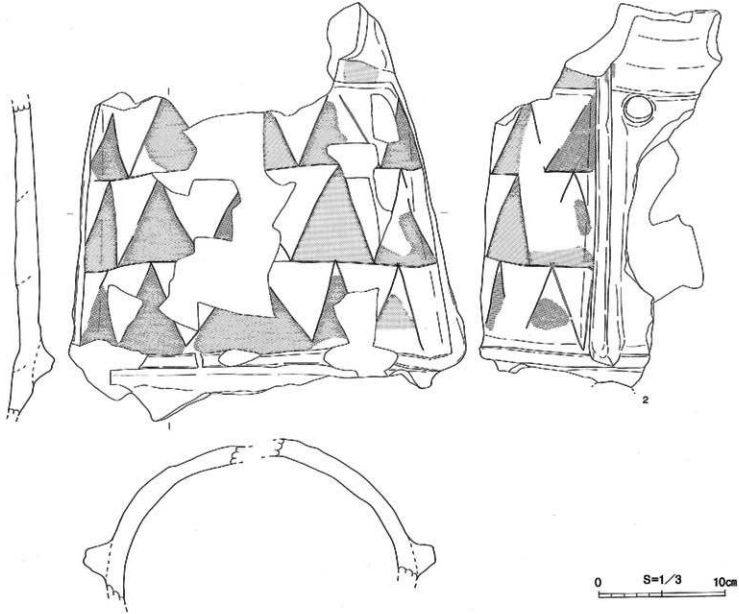
第34図　盾形埴輪



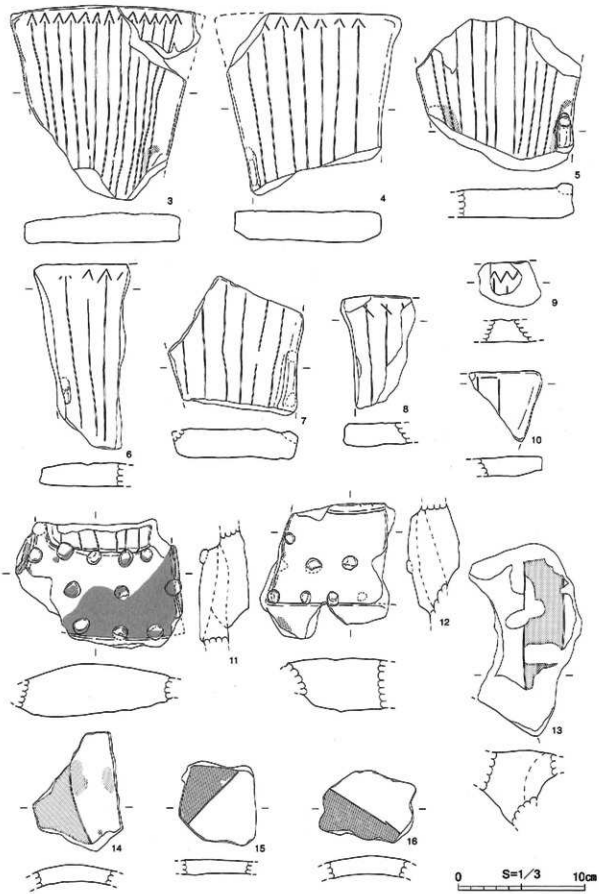
第35図　矛形埴輪



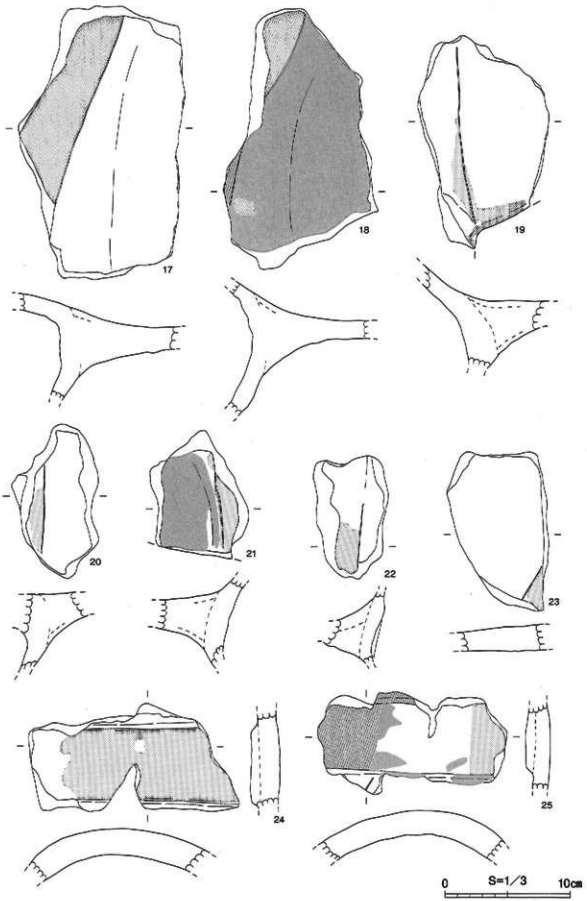
第36図　靫形埴輪（1）



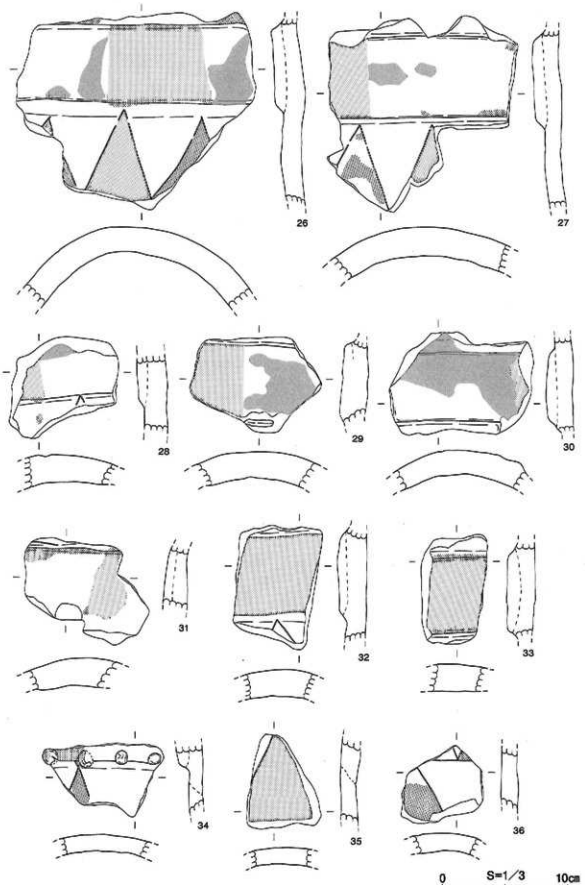
第37図　籾形埴輪（2）



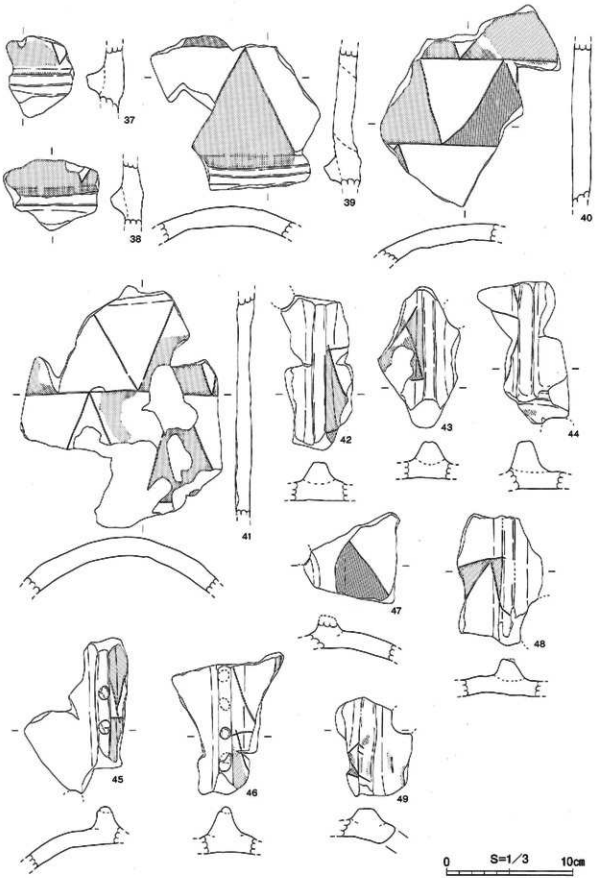
第38図　鞍形埴輪（3）



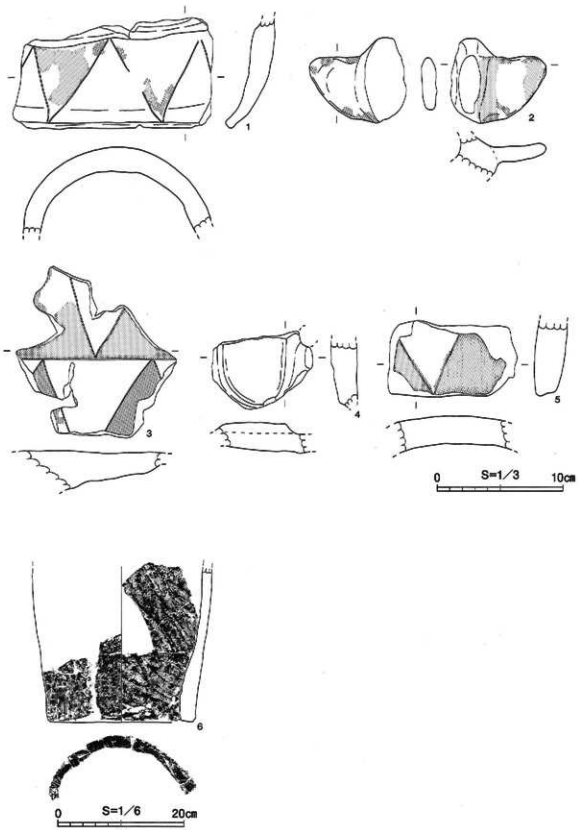
第39図　鞍形埴輪（4）



第40図　鞍形埴輪（5）



第41図　鞍形埴輪（6）



第42図　器種不明の形象埴輪

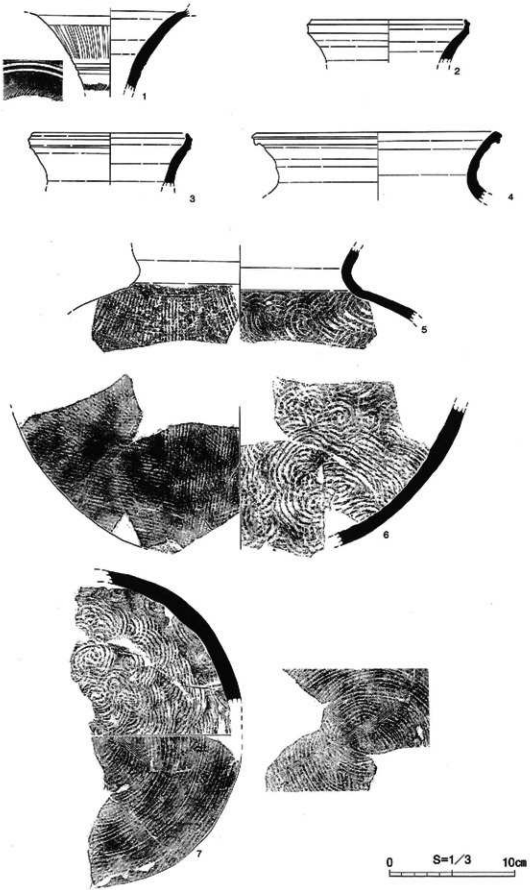
3　その他の出土遺物

(1) 須恵器

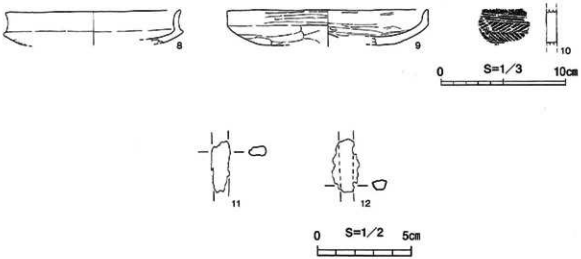
1は甕で頸部のみが残存する。2・3は小型甕の口縁部の小破片である。同一個体の可能性が高い。4は甕の口縁部の破片である。口縁端部に一条の沈線を有する。5・6は甕である。5は頸部から胴部にかけての破片である。頸部はロクロ成形による。胴部外面は平行叩き具痕を残し、その後櫛歯状工具で施文されている。胴部内面には同心円文を残す。6は底部片である。外面は平行叩き具痕を残し、内面には同心円文を残す。7は横瓶である。外面は平行叩き具痕を残し、内面には同心円文を残す。

(2) 鉄製品

本古墳からは明治31年の調査で玄室内から馬具、武具など多くの鉄製品を検出している。また、本調査においても鉄鏃が奥壁前の埋土中から出土している。1、2ともに鉄鏃の頸部である。どちらも関などは見受けられず、器種は不明である。



第43図　その他出土遺物（1）



第44図　その他出土遺物（2）

第4表　出土土器観察表

No.	器種	部位	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	特徴	色調	含有物	焼成	出土位置
1	須恵器瓶	頸部	－	(6.5)	ロクロ成形(右回転)。自然釉が付着し、一部黄褐色に変色している。全体をナデたのちに、縦方向に櫛歯状工具を用いて施文。口縁部付近は再度ナデを施し、整形している。頸部には二条の沈線を、その下部には櫛歯状工具による列点文を施している。胴内がセピア色を発色する。	内外：青灰色	白色粒	良好	B調査区 埋頭部
2	須恵器 小壺瓶	口縁部	13.0	(3.4)	ロクロ成形。3と同一個体か。	内：青灰色 外：黒色	白色細砂粒	良好	埋頭部
3	須恵器 小壺瓶	口縁部	13.0	(4.1)	ロクロ成形。降灰により、まだらに黄褐色に変色している。	内外：青灰色	白色細砂粒	良好	B調査区 上段
4	須恵器甕	口縁部	20.0	(5.0)	ロクロ成形。自然釉が付着し、一部暗い光沢のあるオリーブ色に変色している。口縁端部に一条の沈線を有する。胴内がセピア色を発色する。	内：青灰色 外：黒色	白色粒 砂粒	良好	B調査区 埋頭部
5	須恵器甕	頸部	－	(5.8)	ロクロ成形。胴内はセピア色、外面は降灰により黄褐色を発色する。外面は平行の叩き具痕を残し、頸部接続部に櫛歯状工具で施文されており、内面には同心円文の当て具痕が残存する。	内外：青灰色	白色粒 小石	良好	B調査区 埋頭部
6	須恵器甕	底部	－	(10.5)	内面底部には降灰による光沢がみられる。外面には平行の叩き具痕、内面には同心円文の当て具痕が残存している。胴内はセピア色を発色する。	内外：青灰色	白色粒 砂粒	良好	B調査区 埋頭部
7	須恵器横瓶	胴部	－	(10.6)	外面にはかき目、内面には同心円文の当て具痕が残存する。胴部側部には櫛状の工具を用いて十字に施文している。成形に伴う叩きののちに、工具を用いてナデを施している。	内外：灰色	白色細砂粒	良好	B調査区 埋頭部
8	土師器坏	口縁部	14.0	(2.6)	口縁部は短く立ち上がる。外面にはヘラ削りが施す。内面にはヘラ磨きが施されたか。	内外：橙色	黒色細砂粒	良好	A調査区 上段
9	土師器坏	口縁部	16.0	(2.8)	体部外面には稜が見受けられる。口縁部は外反する。外面にはヘラ削り、内面にはヘラ磨きを施している。また、外面口縁部にもヘラ磨きを施す。	内外：橙色	白色細砂粒	良好	B調査区 中段
10	弥生土器	胴部	－	(3.0)	ヘラ描きによる文様あり。	内：灰褐色 外：暗黄褐色	白色細砂粒	普通	後円部 埋頭部

第5表　出土鉄鏃観察表

No.	部位	法量(cm) 長	法量(cm) 幅	法量(cm) 厚	重量(g)	出土位置	備考
11	頸部	(2.7)	1.0	0.5	1.7	玄室埋土	
12	頸部	(2.8)	1.4	0.6	2.6	玄室埋土	頸部本体の幅は0.7cm

Ⅳ　おわりに

（1）遺構について

本調査で瓦塚古墳は墳丘の周りに周溝を持つ二段築成の前方後円墳であることがわかった。上段には葺石が施され、中段には平坦面を設けて埴輪列が囲繞している。調査が不十分なところも多く、全貌の解明は叶わなかったが、葺石の施工方法を平面的に確認することや周溝の範囲を確定することにより、これまで報告されていた墳丘の規模や構造を見直すことができた。本古墳は全長48m、前方部前端幅38m、後円部径28mで、3.3～9.6mの幅の周溝をもつということが今回の調査の成果として得られた。

後世の盗掘による攪乱の範囲が主体部まで及んでいたため、石室の玄室部分の破壊が特に凄まじく、立ち入りには危険が伴うものであった。したがって、本調査では長時間の玄室内への立ち入りは断念し、墓道から玄門までの範囲を中心に調査した。

宇都宮丘陵に所在する古墳のほとんどが凝灰岩を使った石室であることは知られている。その中でも本古墳の石室の構造は北山古墳群に属する権現山古墳に類似することがわかった。瓦塚古墳群に属する円墳の中でT字形横穴式石室を有するものがある。これと同様に北山古墳群に属する権現山1号墳も円墳でT字形横穴式石室をもつのである。いずれの古墳群も田川流域に位置すること、後述するが円筒埴輪の形態が類似すること、さらにはこのように類似する石室構造を有していること等から、この2つの古墳群には関連があったとみられる。

（2）遺物について

本調査では多くの埴輪を検出したが、円筒埴輪列の基底部はそのまま残して埋め戻しをしたため、整理作業時には基底部から胴部にかけて復元できるものはほとんどなかった。また、本稿で扱った埴輪片の大半が原位置を保っていなかったとみられ、埴輪配列は復元することはできず、想定するにとどまる。

円筒埴輪は出土状況から、墳丘中段のテラス面において墳丘の周りを囲繞して並べられていたことがわかった。これらの円筒埴輪は隣との間隔が狭く、口縁部はほぼ接触して並べられていたとみられる。また、朝顔形埴輪も各調査区から出土していることから、円筒埴輪とともに朝顔形埴輪も墳丘を囲繞するように並べられていたと推測される。なお、円筒埴輪と朝顔形埴輪の墳丘上に並べられた個数の比率は不明であるが、出土量的に円筒埴輪数本の間に朝顔形埴輪が1本並べられていたと考えるのが適当だろう。瓦塚古墳の円筒埴輪は底部径が25㎝～30㎝内外の大型のもので、第2突帯と第3突帯の間に透孔が配されていたと考えられる。これらの円筒埴輪の特徴から、墳丘に並べられていた埴輪も権現山古墳から出土した円筒埴輪と類似していることが窺える。また、本古墳の円筒埴輪の胎土には凝灰岩の砂粒が混入していることも特徴と言えるだろう。円筒埴輪の製作方法や特徴を検討すると本古墳の円筒埴輪は川西編年のⅤ期に（川西1978）、また、栃木県中・南部における円筒埴輪の編年においては6世紀後半前葉にあたるⅤ期に相当するとみられる（小森1984）。

形象埴輪についてはまず、器財埴輪の個体数が非常に多いことが確認できた。靫形埴輪、大刀形埴輪、盾形埴輪はいずれも墳頂部付近において検出されたことから、前方部墳頂の埴輪列には

器財埴輪を中心に並べていたことが想像される。本古墳から出土する形象埴輪は装飾が派手に施されるものが多く、特に鋸歯文を線刻した物に赤彩を塗布する例が非常に多く見受けられた。どの器種においても上向きの三角形の中に赤彩を施す傾向があることが確認できた。家形埴輪に関しては突帯部に粘土粒を貼り付けるなどの装飾を施していることが特徴であると言える。また、家形埴輪は後円部墳頂の中心部に樹立され、その周りを円筒埴輪と器財埴輪が取り囲んでいたと推測される。

人物埴輪は本調査においては石室の開口部に近いくびれ部周辺のテラス面に並べられていたことが確認された。人物埴輪片の出土状況から本古墳に並べられた埴輪の数は最低でも６個体であったと先述した。しかし、東京帝国大学の調査と本調査で出土した人物埴輪の頭部は女子像が３体、男子像が２体である。また、美豆良は最低でも４人分が出土している。東京帝国大学の調査で検出された男子像はいずれも美豆良が欠損した状態であり、本調査で出土した美豆良を仮に当てはめていくと、男子像はあと２体並べられていたと考えることができる。したがって、本古墳に並べられた人物埴輪は最低でも７個体であったと言えるだろう。また、本調査ではかんざしの表現とみられる粘土粒が額に貼り付けられた痕跡のある女子埴輪が出土した。明治31年の東京帝国大学による調査で女子埴輪の頭部が２つ確認されているが、いずれも額に粘土粒が貼りついていることが『東京人類学会雑誌』第155号に記載されているスケッチから窺える。このかんざしの表現は本古墳の女子埴輪の特徴であるといえる。瓦塚古墳は少なくとも島田髷を有する女子像が３体、美豆良を有する男子像が４体並べられていたと推測される。女子像のうち１体は坏を奉献する巫女であることが想像できる。また、男子像については、大刀を有する貴人または武人が１体、靫を背負う人が１体並べられていたと考えられる。なお、足の甲のような埴輪片が出土していることから、貴人または武人埴輪は双脚であったと推測できる。上記の観察、考察から、瓦塚古墳には祭人像と頌徳像(註1)の２種類の性格の埴輪が並べられていたことが窺えるが、人物埴輪群の全体像までは見出せなかった。

本調査で出土した須恵器はすべて前方部墳頂からの検出である。墳頂部に埴輪と共に並べられていたことから、古墳築造後の何らかの儀礼で用いられたと考えられる。また、出土した器種が甕や甑であることから、共飲儀礼のような儀礼が執り行われていた可能性があるとみられる。

本報告書を作成するにあたり、これまでの瓦塚古墳の調査データをまとめ、部分的に考察することができた。しかし、未だ不明な部分も多く、引き続き資料の検討を重ねていく必要があり、今後の研究成果を待ちたい。

(註)

(１) 梅澤重昭1998「綿貫観音山古墳の埴輪祭祀」『綿貫観音山古墳Ⅰ－墳丘・埴輪編－』

【参考文献】

市毛勲　1984『朱の考古学』雄山閣出版
稲村繁　1999『人物埴輪の研究』同成社
宇都宮市教育委員会　1985『瓦塚古墳群・日満遺跡』
宇都宮市教育委員会　1985『稲荷古墳群』
宇都宮市教育委員会　1992『宇都宮市文化財年報』第８号
宇都宮市教育委員会　2003『宇都宮市文化財年報』第18号
宇都宮市教育委員会　2004『宇都宮市文化財年報』第19号
宇都宮市教育委員会　2005『宇都宮市文化財年報』第20号
宇都宮大学考古学研究会　1985「宇都宮市岩本町権現山古墳墳丘測量及び石室実測調査報告」『峰考古』第５号
川西宏幸　1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２号　日本考古学会
群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団　1998『綿貫観音山古墳Ⅰ』
小森哲也　1984「栃木県古墳出土遺物考（Ⅰ）－鉄鏃の変遷－」『栃木県考古学会誌』第８集 栃木県考古学会
近藤義郎　1994『前方後円墳集成』東北・関東編　山川出版社
塩谷修　2014『前方後円墳の築造と儀礼』同成社
社会研究部　1991「瓦塚古墳測量調査報告」『作新』第33号　作新学院
橋本博文　1992「配列、組合せの変遷」『古墳時代の研究』第９巻　古墳Ⅲ　埴輪　雄山閣出版
水野正好　1971「埴輪芸能論」『古代の日本』第２巻　風土と生活　角川書店
八木奘三郎　1899「下野国河内郡長岡の古墳」『東京人類学会雑誌』第155号
山内紀嗣　1992「復原される儀礼」『古墳時代の研究』第９巻　古墳Ⅲ　埴輪　雄山閣出版
山ノ井清人　1979「瓦塚古墳群と瓦塚古墳」『宇都宮市史』第１巻　原始古代編

写　真　図　版

第 1 調査区全景（南東から）

第 1 調査区周溝セクション（南西から）

PL2

第２調査区全景（南西から）

第２調査区周溝内側立ち上がり（西から）

第２調査区周溝セクション（北西から）

第２調査区円筒埴輪列と葺石（西から）

PL4

第３調査区全景（北東から）

第３調査区周溝内側立ち上がり（北から）

第３調査区円筒埴輪列と葺石（北東から）

第３調査区周溝円筒埴輪列とセクション（西から）

第４調査区全景（西から）

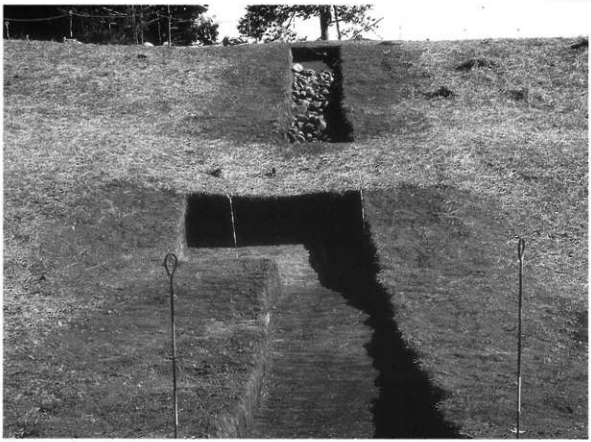
第４調査区周溝内側立ち上がり（西から）

第5調査区円筒埴輪列（南から）

第6調査区周溝セクション（南西から）

C調査区風景（西から）

C調査区前方部コーナー（南西から）

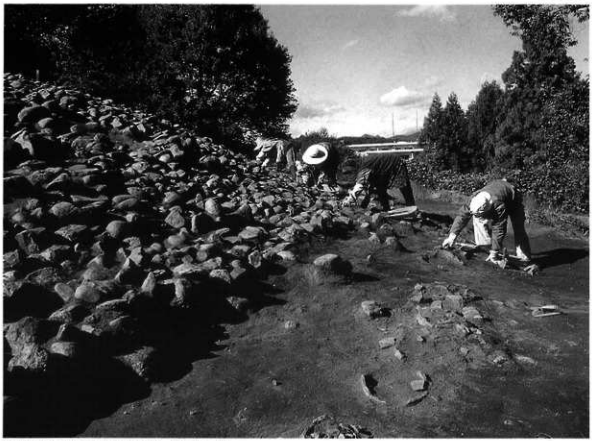


第７調査区全景（北西から）

第７調査区円筒埴輪列と葺石（北西から）

第８調査区調査風景（南西から）

第９調査区周溝セクション（南西から）



後円部南東側の葺石調査風景（南東から）

後円部南東側の葺石（南東から）

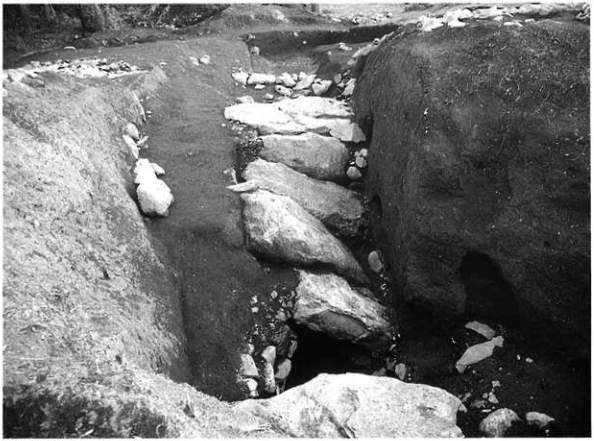
前方部南東側の葺石（東から）

くびれ部南東側の葺石（南東から）

後円部中央付近の攪乱状況（南から）

横穴式石室天井石の確認（南から）

横穴式石室天井石付近の調査風景（北から）



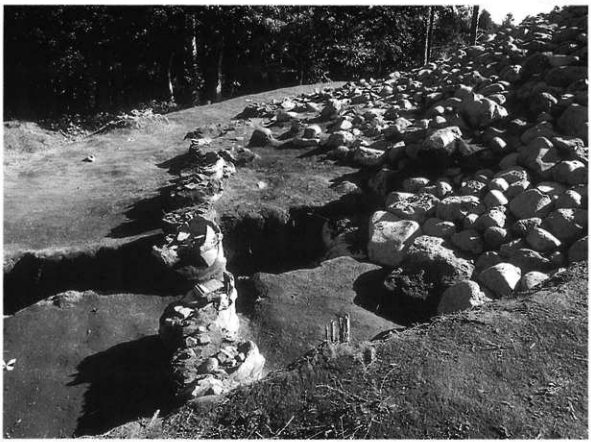
横穴式石室天井石全景（北から）

横穴式石室奥壁（南から）

横穴式石室玄門付近（北から）

横穴式石室羨道東側壁（西から）

横穴式石室墓道（南から）



後円部北東側円筒埴輪列（北から）

前方部南東側円筒埴輪列（南から）

前方部南東側人物埴輪出土状況（東から）

前方部南東側人物埴輪１・10出土状況

墳頂部埴輪列調査風景（北東から）

墳頂部埴輪列（南西から）

墳頂部須恵器出土状況（南西から）

須恵器甕口縁部破片

須恵器甕胴部破片

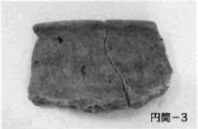
現地説明会風景（前方部南東側）

現地説明会風景（くびれ部南東側）

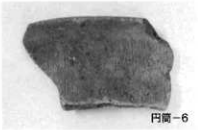
PL22

円筒－1

円筒－2


円筒－3

円筒－5


円筒－6

円筒－4

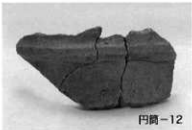
円筒－8

円筒－10

円筒－7

円筒－9

円筒－11


円筒－12

円筒－13

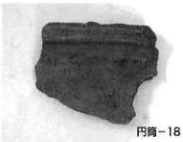
円筒－14

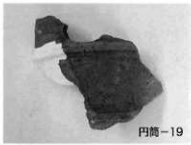
円筒－15

円筒－16

円筒－17

出土遺物（1）


円筒－18


円筒－19

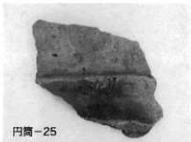
円筒－20

円筒－21

円筒－22

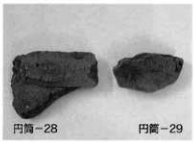
円筒－23

円筒－24


円筒－25

円筒－26

円筒－27


円筒－28　円筒－29

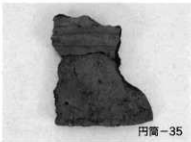
円筒－30

円筒－31

円筒－32

円筒－33

円筒－34


円筒－35

円筒－36

出土遺物（2）

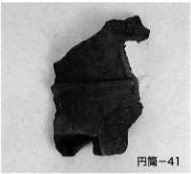
PL24

円筒－37

円筒－38

円筒－39

円筒－40


円筒－41

円筒－42

円筒－43

円筒－44

円筒－45

円筒－46

円筒－47

円筒－48

円筒－49

円筒－50

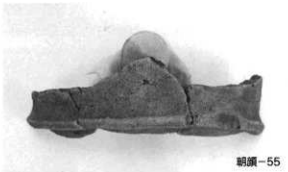
出土遺物（3）

朝顔－51

朝顔－52

朝顔－53

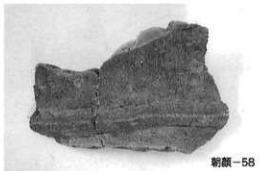
朝顔－54

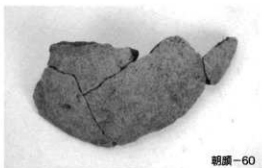

朝顔－55

朝顔－56

朝顔－57

朝顔－59

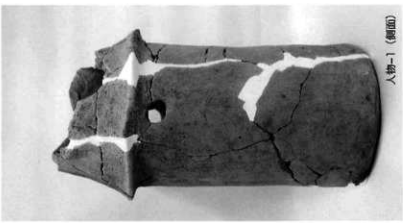

朝顔－58

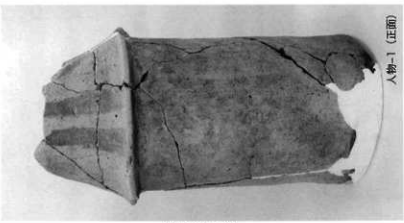

朝顔－60

出土遺物（4）

人物-2（側面）

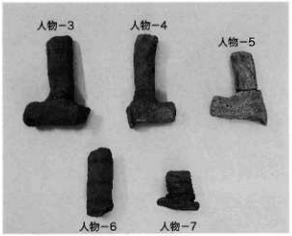
人物-2（正面）


人物-1（側面）


人物-1（正面）

出土遺物（5）

人物−8



人物−9

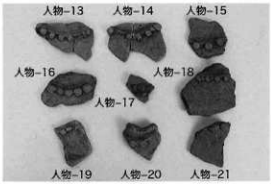
人物−10（正面）

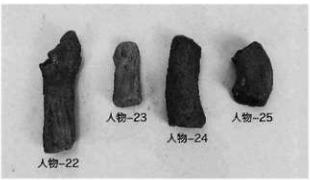
人物−10（側面）

人物−10（斜め）

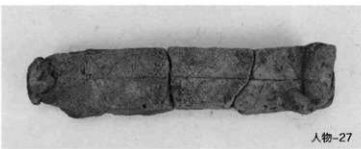
出土遺物（6）

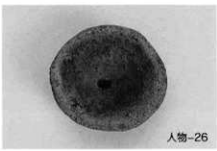
人物-11
人物-12

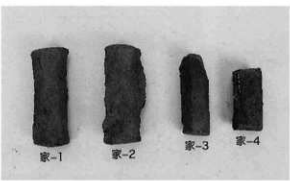

人物-13
人物-14
人物-15
人物-16
人物-17
人物-18
人物-19
人物-20
人物-21

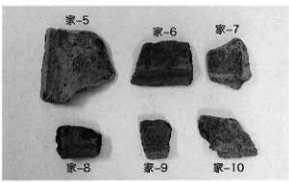

人物-22
人物-23
人物-24
人物-25

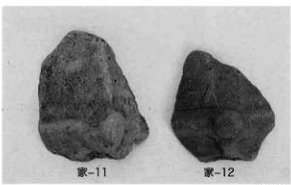
人物-28

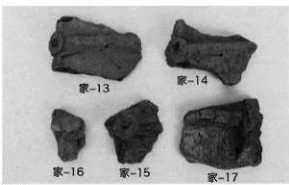

人物-27


人物-26

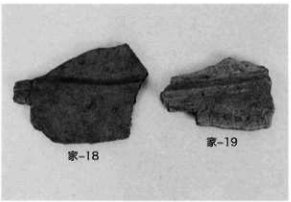

家-1
家-2
家-3
家-4

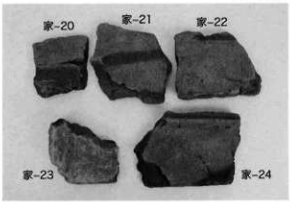

家-5
家-6
家-7
家-8
家-9
家-10

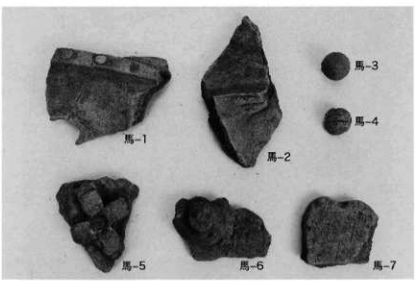

家-11
家-12

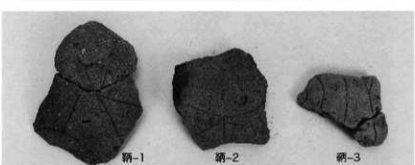

家-13
家-14
家-16
家-15
家-17

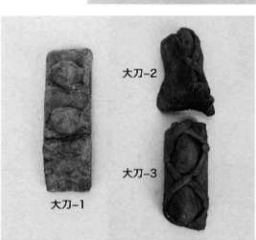
出土遺物（7）

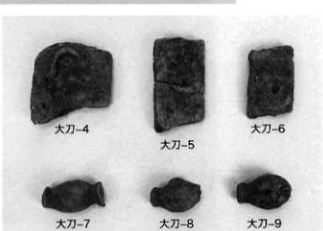

家-18
家-19


家-20
家-21
家-22
家-23
家-24

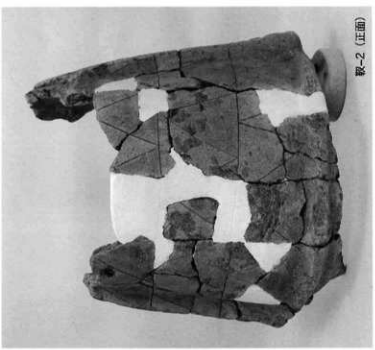

馬-1
馬-2
馬-3
馬-4
馬-5
馬-6
馬-7


鞍-1
鞍-2
鞍-3

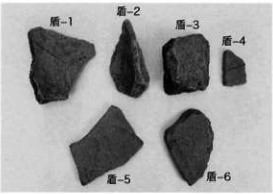

大刀-1
大刀-2
大刀-3

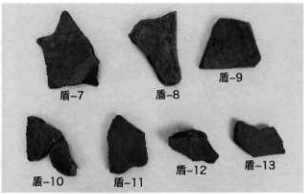

大刀-4
大刀-5
大刀-6
大刀-7
大刀-8
大刀-9

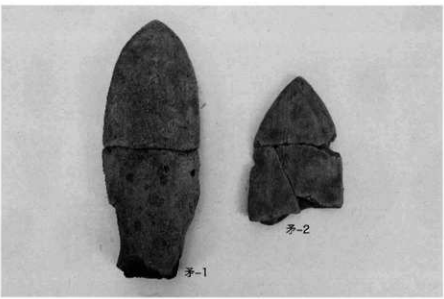
出土遺物（8）

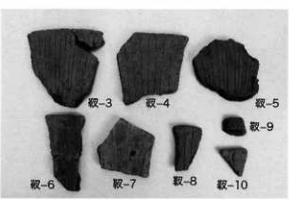


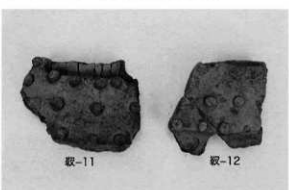
出土遺物（9）

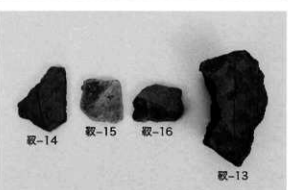

盾-1
盾-2
盾-3
盾-4
盾-5
盾-6

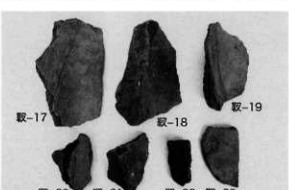

盾-7
盾-8
盾-9
盾-10
盾-11
盾-12
盾-13


矛-2
矛-1


鏃-3
鏃-4
鏃-5
鏃-9
鏃-6
鏃-7
鏃-8
鏃-10

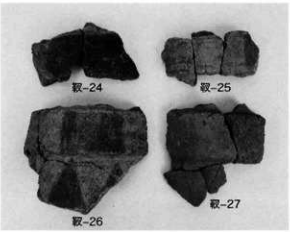

鏃-11
鏃-12

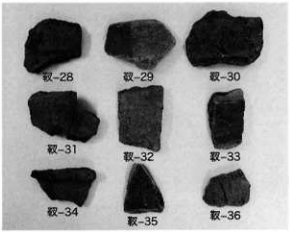

鏃-14
鏃-15
鏃-16
鏃-13

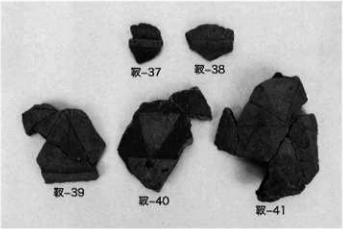

鏃-17
鏃-18
鏃-19
鏃-20
鏃-21
鏃-22
鏃-23

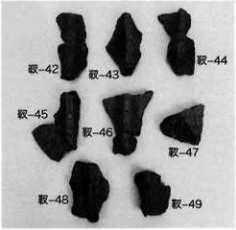
出土遺物（10）

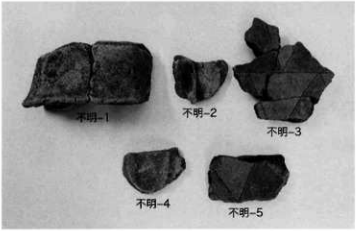
PL32


鞍-24
鞍-25
鞍-26
鞍-27

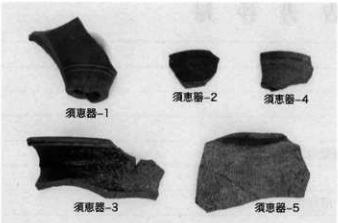

鞍-28
鞍-29
鞍-30
鞍-31
鞍-32
鞍-33
鞍-34
鞍-35
鞍-36


鞍-37
鞍-38
鞍-39
鞍-40
鞍-41


鞍-42
鞍-43
鞍-44
鞍-45
鞍-46
鞍-47
鞍-48
鞍-49

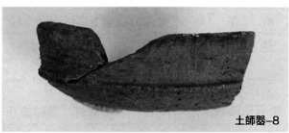

不明-1
不明-2
不明-3
不明-4
不明-5

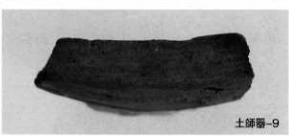
不明-6


須恵器-1
須恵器-2
須恵器-4
須恵器-3
須恵器-5

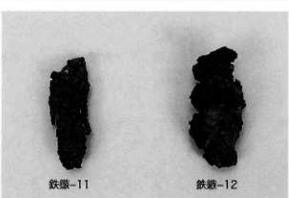
須恵器-6

須恵器-7


土師器-8


土師器-9

弥生土器-10


鉄鏃-11
鉄鏃-12

報告書抄録

ふりがな	かわらづかこふん
書名	瓦塚古墳
副書名	
巻次	
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第104集
編著者名	澁谷麻友子　梁木誠　清地良太
編集機関	宇都宮市教育委員会
所在地	宇都宮市旭1丁目1番5号　℡028-632-2764
発行年月日	西暦　2019年（平成31年）3月29日

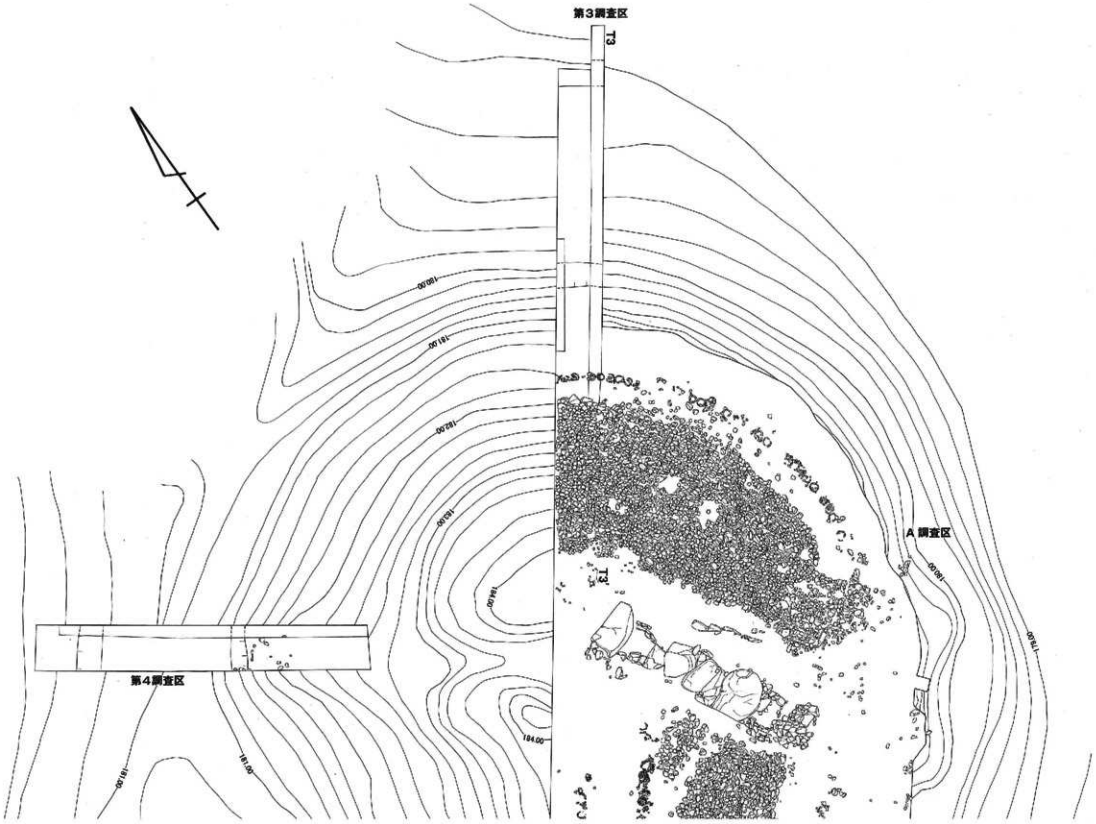
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かわらづかこふん 瓦塚古墳	うつのみやし 宇都宮市 ながおかちょう 長岡町	09201	2354	36度 60分 11秒	139度 88分 17秒	200100731 ～ 20031219	1,900	史跡整備 に伴う 確認調査

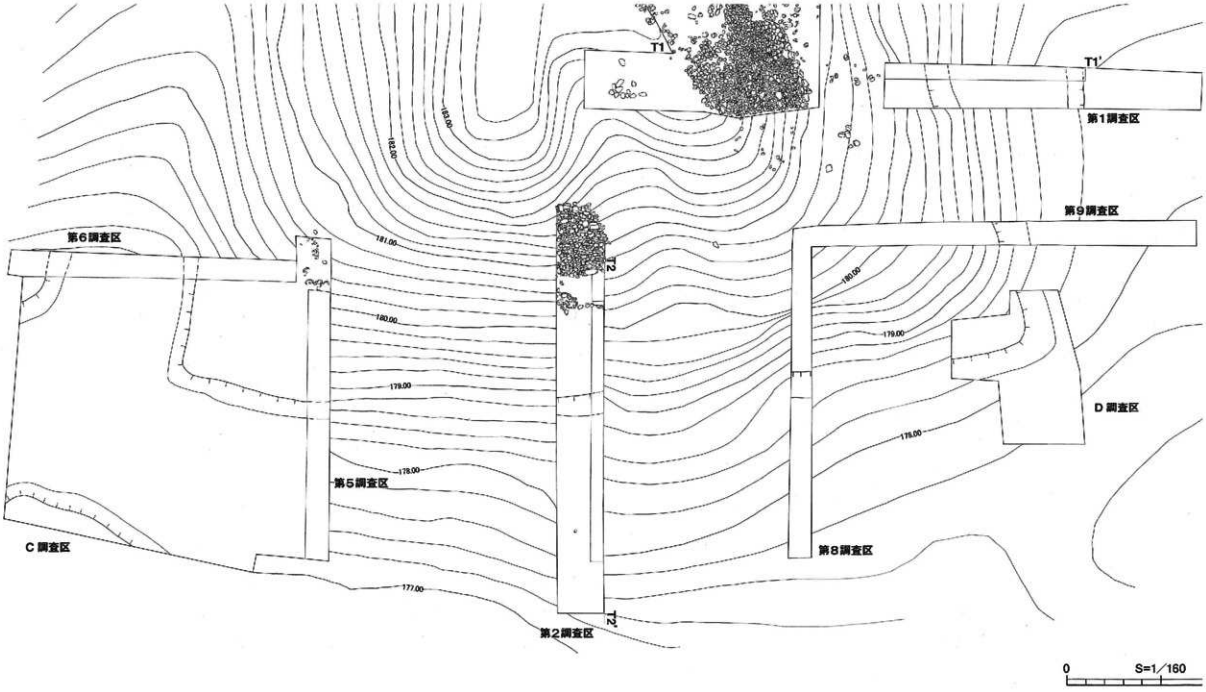
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
瓦塚古墳	古墳	古墳	古墳　1基	埴輪（円筒・朝顔形・人物・家形・馬形・鞆形・大刀形・盾形・矛形・靫形），須恵器，土師器，鉄鏃	

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第104集

瓦塚古墳

発　行　宇都宮市教育委員会
編　集　宇都宮市教育委員会
宇都宮市旭1丁目1番5号
TEL　028-632-2764
発行日　平成31年3月29日発行
印　刷　有限会社　印刷親友社
宇都宮市瑞穂3－9－11
TEL　028-656-3655


第3調査区
T3
A調査区
T3
第4調査区
184.00
181.00


T1
T1'
第1調査区
第9調査区
第6調査区
T2
D調査区
第5調査区
C調査区
第8調査区
第2調査区
T2'
183.00
182.00
181.00
180.00
179.00
178.00
177.00
0
S=1/160

瓦塚古墳全体図